

法政大学
国際日本学研究センター
国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.11 Oct.2009.



2009年6月5日（金）

柳田国男『後狩詞記』出版百周年記念シンポジウム
（法政大学市ヶ谷キャンパスボアソナード・タワー
26階A会議室にて）

C O N T E N T S

シンポジウム報告	2
特別研究会報告	5
研究会報告	8
東アジア文化研究会報告	11
研究所訪問報告	18
お知らせ	27
新刊案内	28

柳田国男『後狩詞記』 出版百周年記念シンポジウム

- 日 時：2009年6月5日（金）13時00分～18時30分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26階A会議室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）

法政大学国際日本学研究所は、去る6月5日（金）法政大学ポアソナード・タワーで「柳田国男『後狩詞記』出版100周年記念シンポジウム」を開催した。

柳田国男の膨大な仕事は、20世紀を通じて日本の思想史並びに文化史の研究に多大な影響をおよぼした、または、日本民俗学の設立、日本民族学・文化人類学の発展に大きく貢献した。

今からちょうど百年前、明治42（1909）年の春、柳田はこの民俗学の分野における最初の業績になる著書『後狩詞記』を自費出版した。その中で、前の年明治41年柳田が農商務省法制局参事官（宮内省書記官兼任）として九州視察旅行の合間をぬって九州山地を歩いて見聞したこと、なかんずく椎葉村の狩猟文化や焼き畑農業について地元のインフォマントから得た資料をまとめて、彼の日本文化論の基盤として発表した。すなわち、日本民族文化は一元的な起源をもった均一的なものではなく、むしろいくつか、少なくとも二つのはっきり違った要素の複合から成っているものであると強調した。その一つは、現在（明治）に至るまで山地に残っている狩猟、採集、焼き畑の文化である。それに対して、もう一つは、水田稲作中心としていた平坦地の民族である。ただ、柳田は、大正時代の

沖縄旅行以降、この稲作中心の日本文化の一元的な性格を自分の研究の中心にしてきたが、最後までその問題を未解決のものと考えていた。柳田は、明治近代化の過程のなかで、高級官僚として、自由に山のなかを動いている非定住の山の民を、なんとかして明治近代国家の枠組に組み入れようと考えていた。その立場から焼き畑経済を九州に渡る前から非常に批判的にみていたが、焼き畑経済を観察することは椎葉村に入る大きな要因であったが、椎葉村から帰るときむしろ狩猟の文化に刺激され、焼き畑経済もまた違った目で見えるようになった。

『後狩詞記』は後の『遠野物語』ほどには一般に知名度は高くならなかったが、柳田自身が後の著作・論文で幾度もこれにふれており、『後狩詞記』こそはまさに日本民俗学の出発点と見るべきと強調している。

この本が「市ヶ谷」（序文）で発行された時から百年になるのにちなんで、民族学・文化人類学の長い伝統ある法政大学は、全国の柳田研究ないし椎葉村の実地調査を重ねた著名な先生方の協力を得て、シンポジウムを開催し、大きな成果をおさめることができた。ちなみに、法政大学図書館はこのシンポジウムをきっかけに柳田の直筆の署名が入った初版本一冊を購入し、準貴重本として所蔵している。シンポジウムの間にはこれが他の関係資料とともにロビーに展示された。

シンポジウムは大きな反響を呼び、60名以上の関係者が来場し、なかには柳田の子孫及び、民族学設立の岡正雄の長男の来場を得ることができた。

なお、シンポジウムの報告及び討論は、クライナーの編集責任で国際日本学叢書の一冊として刊行する予定である。また、このシンポジウムに参加できなかった二人の研究者、一人は採集経済専門家の国立民族学博物館教授池谷利信先生、もう一人は山茶については静岡産業大学教授中村羊一郎先生で、それぞれ報告のかたちで紙面参加の約束を得ている。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）】

プ ロ グ ラ ム

- 13:00～13:10
開会 / 挨拶 法政大学国際日本学研究所所長 安孫子信
- 13:10～13:40
クライナー・ヨーゼフ（法政大学特任教授）
「柳田国男の日本——『後狩詞記』・『遠野物語』から『海南小記』や『海上の道』にいたる——」
- 13:40～14:20
野本寛一（近畿大学名誉教授）
「『後狩詞記』のムラから学ぶ」
- 14:20～15:00
佐々木高明（国立民族学博物館名誉教授）
「焼畑農民の狩猟——今も焼き畑とイノシシ狩の行わる台湾山地民との比較から——」
- 15:00～15:20
休 憩
- 15:20～16:00
原田信男（国士舘大学21世紀アジア学部教授）
「シシ肉の文化——供犠と食用——」
- 16:00～16:40
川野和昭（黎明館学芸課長）
「焼き畑と竹と黒（赤）米と里芋と——ラオス北部からの逆照射——」
- 16:40～17:40
姫田忠義（民族文化映像研究所所長）
「柳田国男の風景」（NHK ふるさと歴史紀行）【解説15分】
- 17:40～18:20
総括討論



ヨーゼフ・クライナー 氏

Report on Symposium

Publication of Yanagita Kunio's *Nochi kari kotoba no ki* (Notes on traditional hunting lore): a 100th Anniversary Symposium

Date Friday, 5 June 2009, 13:00-18:30
 Venue Hosei University Ichigaya Campus
 Boissonade Tower 26F Conference Room A
 Chair Josef KREINER (Special Professor, Hosei University)

The Research Center for International Japanese Studies held its "Publication of Yanagita Kunio's *Nochi kari kotoba no ki* (Notes on traditional hunting lore): a 100th Anniversary Symposium" on 5 June. Yanagita Kunio greatly influenced research of the history of thought and cultural history in Japan throughout the 20th century. One hundred years ago, in spring of Meiji 42 (1909), Yanagita published, with his own funds, what was to become the first work in the field of folklore studies, *Nochi kari kotoba no ki*. The previous year, Meiji 41, he found some time out to walk through the mountains of Kyushu, whilst on a south-west Japan observation mission as an elite bureaucrat from the Ministry of Agriculture and Industry. What he saw and heard there, and the data he collected chiefly from the hunting culture and slash-and-burn farming of Shiiba Village, he presented in the work as a basis for his own Japanese cultural theory. In other words, he emphasized that Japanese ethno-culture was not uniform and stemming from one origin, rather it emanated from, perhaps, several, but at least two, clearly different composites. Yanagita himself insisted that *Nochi kari kotoba no ki* should signify the beginning of Japanese folklore studies.

To mark the 100 years since its publication, Hosei University hosted this symposium with a successful outcome, thanks to the cooperation of country-wide scholars experienced in Yanagita research and Shiiba Village field-

work. Our university library also took the opportunity of purchasing an original edition containing Yanagita's signature, and it will be housed in the rare book collection. Throughout the symposium this was exhibited along with other related material.

There are plans to publish the papers and discussions in one volume of the Research Center for International Japanese Studies Series.

Program	
13:00-13:10	Opening/Greeting: Director of Hosei University Research Center for International Japanese Studies, ABIKO Shin
13:10-13:40	KREINER, Josef (Special Professor, Hosei University) "Yanagita Kunio's Japan: from <i>Nochi kari kotoba no ki</i> , <i>Tōno monogatari</i> to <i>Kainan shoki</i> and <i>Kaijō no michi</i> "
13:40-14:20	NOMOTO Kan'ichi (Emeritus Professor, Kinki University) "Learning from the Village Community of <i>Nochi kari kotoba no ki</i> "
14:20-15:00	SASAKI Kōmei (Emeritus Professor, National Museum of Ethnology) "The hunting of Slash-and-burn Farmers: a comparison with the slash-and-burn and wild boar hunting by the Taiwanese mountain dwellers of today"
15:00-15:20	Break
15:20-16:00	HARADA Nobuo (Professor, Faculty of 21st Century Asia, Kokushikan University) "Animal-meat culture: sacrifice and food"
16:00-16:40	KAWANO Kazuaki (Chief Curator of Liberal Arts, Reimeikan Museum Kagoshima) "Slash-and-burn, bamboo, black (red) rice and taro: light shed from Northern Laos"
16:40-17:40	HIMEDA Tadayoshi (Director, Center for Ethnological Visual Documentation) "Yanagita Kunio's Landscape" (NHK Furusato Rekishi Kikō) [- with commentary]
17:40-18:20	Round-up discussion

Report by: Josef KREINER (Special Professor, Hosei University)



会場の様子



総括討論の様子



展示風景

研讨会报告

柳田国男《后狩词记》出版一百周年纪念研讨会

时 间：2009年6月5日（周五）13：00-18：30

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 26层 A 会议室

主持人：约瑟夫·库拉伊那（法政大学特任教授）

2009年6月5日（周五），法政大学国际日本学研究所召开了“柳田国男《后狩词记》出版一百周年纪念研讨会”。纵观 20 世纪，柳田国男给日本的思想史以及文化史研究领域带来了巨大的影响。一百年前的明治 42 年（公元 1909 年）春，柳田国男自费出版了其专著《后狩词记》。该著作也成为了柳田国男在民俗学领域最初的业绩。柳田国男在《后狩词记》中，详尽地记述了其于明治 41 年（公元 1908 年）作为农商务省的精英官僚赴西南日本进行视察旅行期间，利用空闲时间徒步周游九州山地时的所见所闻，尤其是对有关椎叶村的狩猎文化和刀耕火种式农业的资料进行了整理归纳，并将其作为自己的日本文化论的基础而予以发表。换言之，柳田国男通过《后狩词记》强调指出，日本的民族文化并非只是只具有一元性起源的均一性文化，而是由多种，至少是两种截然不同的文化复合而成。柳田国男本人也一再强调，应当将《后狩词记》当作是日本民俗学的出发点来看待。

值此《后狩词记》发行百年之际，法政大学特别邀

请了日本全国著名的柳田研究领域专家以及多次曾前往椎叶村进行实地调查的专家齐聚一堂，从而使得此次研讨会取得了丰硕的成果。法政大学图书馆也以此次研讨会为契机，购入了一册有柳田国男亲笔签名的第一版《后狩词记》作为准珍本书籍予以收藏，并于此次研讨会期间同其它相关资料一道在大厅进行了展示。

此外，法政大学国际日本学研究所将对此研讨会的报告及讨论进行整理，并计划将其作为国际日本学研究丛书中的一册予以刊行。

日 程 表

13：00-13：10	开幕式 / 致辞 法政大学国际日本学研究所所长 安孙子信
13：10-13：40	约瑟夫·库拉伊那（法政大学特任教授） “柳田国男的日本——从《后狩词记》·《远野物语》到《海南小记》、《海上之道》”
13：40-14：20	野本宽一（近畿大学名誉教授） “向《后狩词记》中的村庄学习”
14：20-15：00	佐佐木高明（国立民族学博物馆名誉教授） “刀耕火种的农民的狩猎活动——与目前仍在刀耕火种和狩猎野猪的台湾地区山地原住民的比较”
15：00-15：20	中间休息
15：20-16：00	原田信男（国士馆大学 21 世纪亚洲学部教授） “野猪肉的文化——供奉与食用”
16：00-16：40	川野和昭（黎明馆学艺课长） “刀耕火种、竹子、黑（红）米、芋头——自老撾北部而来的逆照射”
16：40-17：40	姬田忠义（民族文化映像研究所所长） “柳田国男的风景”（NHK 故乡历史纪行）【解说 15 分钟】
17：40-18：20	总结讨论

【执笔者：约瑟夫·库拉伊那（法政大学特任教授）】

심포지움 보고

야나기타 쿠니오 (柳田国男) 『後狩詞記』 (노치카리고토바노키) 출판 백주년 기념 심포지움

- 일 시 2009년 6월 5일 (금) 13시 00분 ~ 18시 30분
- 장 소 세이대학 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스 보아소나드타워 26층 A 회의실
- 사 회 요셉·클라이너 (호세이대학 (法政大学) 특임교수)

국제일본학연구소는 6월 5일 「야나기타 쿠니오 (柳田国男) 『後狩詞記』 출판 백주년 기념 심포지움」을 개최했다. 야나기타 쿠니오는 20 세기에, 일본의 사상사 및 문화사 연구에 지대한 영향을 미쳤다. 지금으로부터 백년 전인 메이지 (明治) 42 년 (1909 년) 봄, 야나기타는 민족학 분야에 관한 최초의 업적으로 평가되고 있는 저서 『後狩詞記』를 자비로 출판했다. 야나기타는 『後狩詞記』를 출판하기 일년 전인 메이지 (明治) 41 년에 농상무성 (農商務省) 엘리트 관료로 서남부 일본 지역을 시찰하게 되는데, 여행 도중 틈틈이 큐슈산지 (九州山地) 를 돌며 견문한 것, 특히, 시이바촌 (椎葉村) 의 수렵문화와 화전농업에 관한 자료를 한데 모아, 자신의 일본문화론의 기반을 이루는 저서로 발표했던 것이다. 야나기타는 이 서적에서, 일본민족문화의 기원은 일원적이고 균일한 것이 아니라, 오히려 여러 가지의, 적어도, 확연히 다른 두 개 이상의 요소가 복합적으로 형성된 것임을 강조했다. 나아가 야나기타는, 『後狩詞記』야말로 일본

민족학의 출발점으로 간주해야 한다고 주장했다.

『後狩詞記』발행 백주년과 관련하여, 호세이대학은 전국의 야나기타 연구자 및 오랫동안 시이바촌 현지조사에 종사하고 있는 연구자들의 협력에 힘입어 심포지움을 개최하여, 큰 성과를 거두었다. 본교 도서관은 이번 기회를 계기로 야나기타의 자필서명이 들어있는 초판본 한 권을 구입하여 준귀중본 (準貴重本) 으로 소장하고 있다. 이 서적은 심포지움 동안 다른 관계 자료와 함께 로비에 전시되었다.

또한, 심포지움에 관한 보고 및 토론 내용은 국제일본학연구총서 중 한 권으로 간행할 예정이다.

프로그램

13:00 ~ 13:10	개회 / 인사 호세이대학 국제일본학연구소 소장 아비코 신
13:10 ~ 13:40	요셉·클라이너 (호세이대학 특임교수) 「야나기타 쿠니오의 일본-『後狩詞記』·『遠野物語』에서 『海南小記』와 『海上之道』에 이르기까지-」
13:40 ~ 14:20	노모토 칸이치 (野本寛一, 간키대학 (近畿大学) 명예교수) 「『後狩詞記』의 마을 (村) 에서 배운다」
14:20 ~ 15:00	사사키 코메이 (佐々木高明, 국립민족학박물관 명예교수) 「화전농민의 수렵-오늘 날까지도 화전과 멧돼지 수렵을 계속하고 있는 대만 산지민과의 비교를 통해서-」
15:00 ~ 15:20	휴 식
15:20 ~ 16:00	하라다 노부오 (原田信男, 고쿠시칸대학 (国士馆大学), 21 세기아시아학부 교수) 「멧돼지고기 문화-제물과 식용-」
16:00 ~ 16:40	가와노 카즈아키 (川野和昭, 레이메이칸 (黎明館) 학예과장) 「화전과 죽 (竹) 과 흑 (적) 미와 토란-라오스 북부지역으로부터의 역조사 (逆照射)-」
16:40 ~ 17:40	히메다 타다요시 (姫田忠義, 민족문화영향연구소 소장) 「야나기타 쿠니오의 풍경」(NHK 고향 역사기행) 【해설 15 분】
17:40 ~ 18:20	총괄토론

【기사 집필：요셉·클라이너 (호세이대학 특임교수)】

法政大学国際日本学研究所特別研究会

「昭和 30 年代の南西諸島の民族学的研究と日本文化論」

● 日 時：2009 年 4 月 13 時 30 分～16 時 40 分

● 場 所：法政大学 市ヶ谷キャンパス 58 年館 2F 国際日本学研究所セミナー室

第三サブ・プロジェクト『日本の中の異文化』の枠内で 4 月 10 日から 25 日にかけて『昭和 30 年代の南西諸島の民族学的研究と日本文化論』というテーマで 6 回にわたって研究会を開催した。広い意味の日本文化の中で、「内地」のいわゆるヤマト文化と並んで、沖縄を中心とした琉球の社会と文化は存在し、その調査研究は日本の基礎文化のより正しい理解に不可欠である。明治時代の先覚者（田代安定、笹森儀助等）につづいて大正時代に沖縄で伊波普猷や東京で柳田国男と折口信夫が南島研究を確立したが、戦後昭和 25 年頃から昭和 40 年にかけて十数年間に南西諸島研究が日本文化論におよぼした影響の意義は格別であった。またそれと同時に、民族学の発展の一方、民俗学の停滞が他方、その両方が南西諸島の現地調査とその理論的な分析に大きく左右された。

民族学の方では、R. ベネディクトの『菊と刀』の刊行や岡正雄、石田英一郎、江上波夫等の構築された歴史民族学的見方、そして澁澤敬三の学際的共同研究のアプローチは注目をあびた。それと比べて民俗学は柳田の民俗学研究所を一つの拠点を得たが、石田をはじめ民族学研究者のするどい批判に答もなく後退したような印象を見受ける。

このような背景の前で、1950 年代奄美をはじめ沖縄本島や先島群島で調査研究を行った日本の文化人類学の指導的な役割を果たして来られた 5 人の先生方をお招きし、それぞれの学問的生い立ち、南西諸島の研究を取り上げた理由、現地調査の経路、そしてその調査研究で得た見解がその後の研究動向にどう影響したか等々について、研究会の発案者クライナーとまじえて自由に発表・討論していただいた。

日本写真家協会名誉会員芳賀日出男先生は数多いスライドを使いながら昭和 30 年から 3 年間にわたって行われた九学会連合の奄美調査を説明、又当時の島の生活を紹介した。国立民族学博物館名誉教授伊藤幹治先生は「南西諸島調査のころを回想する」という題で柳田国男との出会いからはじめて「日琉同祖論」をめぐる最近の先生の学説まで話を広げた。立教大学名誉教授住谷一彦は「奄美と波照間島調査からの氏神信仰の再検討」で河上肇との出会い、そして宗教学の原田敏明先生から受けた感銘を述べた。

都立大学名誉教授村武精一は「沖縄の社会と宗教をふりかえって」の中で、都立大学社会人類学研究室の沖縄総会調査を紹介し、最後は元跡見学園女子大学教授の植松明石女史が「消えたシマ——新城パナリ下地の焼き畑農業をめぐる」を報告、当時の調査の分析やその出版計画についても触れた。

総括すると、クライナーを含めた報告者は、最初に考えたよりも柳田をはじめ大藤時彦や折口信夫のような民俗学の代表的な先生方の影響を強く受け、それぞれの問題意識の基盤としたと思っても差し支えない。

プ ロ グ ラ ム

時 間 13:30～16:40

場 所 法政大学 市ヶ谷キャンパス 58 年館 2F 国際日本学研究所セミナー室

4 月 10 日（金）

クライナー・ヨーゼフ（法政大学特任教授）
「昭和 30 年代の日本民族学・民俗学の現状」

4 月 11 日（土）

クライナー・ヨーゼフ（法政大学特任教授）
「昭和 30 年代の日本民族学・民俗学の転換」

4 月 17 日（金）

芳賀日出男（財団法人日本写真家協会名誉会員）
「昭和 30～32 年の九学会連合の奄美調査」（スライド講演）

4 月 18 日（土）

伊藤幹治（国立民族学博物館名誉教授）
「南西諸島調査のころを回想する」

4 月 24 日（金）

住谷一彦（立教大学名誉教授）
「奄美と波照間島調査からの氏神信仰の再検討」
村武精一（東京都立大学名誉教授）
「沖縄の社会と宗教をふりかえって」

4 月 25 日（土）

植松明石（元跡見学園女子大学教授）
「消えたシマ——新城（パナリ）下地の焼き畑農業をめぐる」
総括討論

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）】

Special Research Meeting: report

Academic Frontier Sub-project 3: Other Cultures within Japan

Hosei University Research Center for International Japanese Studies Special Research Meeting “Ethnological Research of the Ryukyuan Islands and Japanese Cultural Theory in the 1950s”

A research meeting was held within the framework of Sub-project 3: “Other Cultures within Japan” on the theme of “Ethnological Research of the Nansei Islands and Japanese Cultural Theory in the Shōwa 30s”, over six occasions from 10-25 April. In the wide sense of the term “Japanese culture”, Ryukyuan – centering on Okinawa – society and culture exist alongside “inland” Yamato culture, and investigative research taking this into account is essential for a more correct understanding of the foundations of Japanese culture. The significance of the effect that Southwestern (Ryukyuan) Islands research, spanning the decades from the Shōwa 30s to 40s, had upon Japanese cultural theory is exceptional. At the same time, the trend for advancement in ethnological studies, and stagnation in folklore studies meant that both fields were greatly influenced by research on the Southwestern Islands combined with theoretical analysis.

It was upon this background in the 1950s that the five scholars invited to this research meeting (HAGA Hideo, ITŌ Mikiharu, SUMIYA Kazuhiko, MURATAKE Seiichi, UEMATSU Akashi) became leading figures in cultural anthropology through their roles in field research on Amami, as well as on Okinawa main island and in the Yaeyama Islands. On this occasion they presented and discussed freely, along with the proposer of the research meeting, Kreiner, on each of their academic histories, their reasons for adopting Southwestern Islands research, their field-

work, and insights gained from this field work that influenced their subsequent research.

Program

Time: 13:30-16:40

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F
Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Friday, 10 April

KREINER, Josef (Special Professor, Hosei University)
“The State of Japanese Ethnology and Folklore Studies in the Shōwa 30s”

Saturday, 11 April

KREINER, Josef (Special Professor, Hosei University)
“The Shift in Japanese Ethnology and Folklore Studies in the Shōwa 30s”

Friday, 17 April

HAGA Hideo (Honorary Member, Japan Professional Photographers Society)
“The Survey of Amami by Kyūgakkai Rengō in Shōwa 30-32” (slide presentation)

Saturday, 18 April

ITŌ Mikiharu (Emeritus Professor, National Museum of Ethnology)
“Reminiscences of field work in the Southwestern Islands”

Friday, 24 April

SUMIYA Kazuhiko (Professor Emeritus, Rikkyō University)
“Re-investigation of Ujigami Beliefs from the Amami and Hateruma field work”
MURATAKE Seiichi (Professor Emeritus, Tokyo Metropolitan University)
“Looking back on Okinawan Society and Religion”

Saturday, 25 April

UEMATSU Akashi (Former Professor, Atomi Gakuen Women's University)
“Vanished Island: Slash-and-burn Agriculture in the Lower Island of Aragusuku/ Panari”

Report by: Josef KREINER (Special Professor, Hosei University)

特别研究会报告

学术开拓推进项目③日本内部的异文化

法政大学国际日本学研究所

特别研究会

“昭和 30 年代的西南诸岛的民族学研究 与日本文化论”

2009 年 4 月 10 日至 25 日, 法政大学国际日本学研究所学术开拓推进项目③“日本内部的异文化”的研究框架内, 以“昭和 30 年代的西南诸岛的民族学研究
与日本文化论”为主题, 连续召开了 6 场研究会。在广义的日本文化之中, 既包括所谓的“内地”的大和文化, 同时也存在着以冲绳为中心的琉球的社会和文化。因此, 如果希望更加正确地理解日本的基础文化, 就必须对琉球的社会和文化进行调查研究。战后, 在从昭和 30 年前后至昭和 40 年的十多年间, 西南诸岛研究给日本文化论带来了巨大的影响, 具有特别重要的意义。与此同时, 民族学的发展和民俗学的停滞在很大程度上也都受到了西南诸岛的实地调查和理论分析的左右。

在这样的背景下, 自 20 世纪 50 年代起, 就有一批日本文化人类学者开始在以奄美为首的冲绳本岛和先岛群岛进行调查研究。鉴此, 在此次特别研究会上, 法政大学国际日本学研究所特意邀请了其中 5 位长期以来在日本的文化人类学研究领域发挥着指导性作用的专家(芳贺日出男、伊藤干治、住谷一彦、村武精一、植松明石)与此次研究会的发起者库拉伊那一同, 就各自的

学术生涯、投身于西南诸岛研究的原因、现场调查的线路、通过调查研究得到了哪些见解以及这些见解对此后的研究动向造成怎样的影响等方面的内容, 进行了自由的发表・讨论。

日 程 表

时间: 13:30-16:40

地点: 法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日本学研究所研究室

- 4 月 10 日(周五)
报告人: 约瑟夫・库拉伊那(法政大学特任教授)
“昭和 30 年代的日本民族学・民俗学现状”
- 4 月 11 日(周六)
报告人: 约瑟夫・库拉伊那(法政大学特任教授)
“昭和 30 年代的日本民族学・民俗学的转换”
- 4 月 17 日(周五)
报告人: 芳贺日出男(财团法人日本摄影家协会名誉会员)
“昭和 30-32 年的九学会联合奄美调查”(配合幻灯片进行演讲)
- 4 月 18 日(周六)
报告人: 伊藤干治(国立民族学博物馆名誉教授)
“追忆西南诸岛调查”
- 4 月 24 日(周五)
报告人: 住谷一彦(立教大学名誉教授)
“重新审视由奄美和波照间岛调查所得出的氏神信仰”
报告人: 村武精一(东京都立大学名誉教授)
“回顾冲绳的社会和宗教”
- 4 月 25 日(周六)
报告人: 植松明石(原迹见学园女子大学教授)
“消失的城镇——新城岛(PANARI 岛)基础的刀耕火种式农业”
总结讨论

【执笔者: 约瑟夫・库拉伊那(法政大学特任教授)】

특별연구회 보고

학술프론티어・서브 프로젝트③ 일본 속의 이문화

호세이대학(法政大学) 국제일본학 연구소 특별연구회

「쇼와(昭和) 30 년대 남서제도(南 西諸島)의 민족학적 연구와 일본문 화론」

제 3 서브 프로젝트『일본 속의 이문화』의 범주 안에서, 4 월 10 일부터 25 일까지『쇼와(昭和) 30 년대 남서제도(南西諸島)의 민족학적 연구와 일본문화론』이라는 테마로 6 회에 걸쳐서 연구회가 개최되었다. 오키나와(沖縄)를 중심으로 한 류큐(琉球)의 사회와 문화는 광의(廣意)의 일본문화 안에「내지(内地)」, 즉, 야마토 문화(일본 민족 고유의 문화)와 동시에 존재하며, 따라서 그 조사연구는 일본 기초문화보다 올바르게 이해하는데 필수불가결하다. 제 2 차 세계대전 이후 쇼와 30 년에서 40 년에 걸친 십수 년 동안 남서제도연구가 일본문화론에 미친 영향은 각별한 의미를 갖고 있다. 동시에, 한편으로는 민족학의 발전, 다른 한편으로는 민족학의 정체라는 두 가지 측면이 남서제도의 현지조사와 그에 따른 이론적 분석에 크게 좌우되었다.

이러한 배경 하에서, 1950 년대 아오미(奄美)를 비롯하여 오키나와본도(沖縄本島)나 사키시마군도(先島群島)에서 조사연구를 실시하여, 일본 문화인류학의 지도적 역할을 담당했던 다섯 명의 연구자(하가 히데오(芳賀日出男) 씨, 이토 미키하루(伊藤幹

治) 씨, 스미야 카즈히코(住谷一彦) 씨, 무라타케 세이이치(村武精一) 씨, 우에마츠 아카시(植松明石) 씨)를 초빙하여, 각각의 학문적 이력, 남서제도를 연구하게 된 연유, 현지조사의 경로, 조사연구를 통해서 습득한 견해가 그 이후의 연구 동향에 어떠한 영향을 미쳤는가 등에 관해, 연구회의 발안자인 클라이너를 포함하여 자유로운 발표와 토론이 이루어졌다.

프로그램

시간 13:30~16:40

장소 호세이대학 이치가야캠퍼스 58 년관 2 층 국제일본학연구소 세미나실

- 4 월 10 일(금)
요셉・클라이너(호세이대학 특임교수)
「쇼와(昭和) 30 년대 일본민족학・민속학의 현황」
- 4 월 11 일(토)
요셉・클라이너(호세이대학 특임교수)
「쇼와(昭和) 30 년대 일본민족학・민속학의 전환」
- 4 월 17 일(금)
하가 히데오(芳賀日出男, 재단법인 일본사진가협회 명예회원)
「쇼와(昭和) 30~32 년 九学会連合의 아오미(奄美) 조사」(슬라이드 강연)
- 4 월 18 일(토)
이토 미키하루(伊藤幹治, 국립민족학박물관 명예교수)
「남서제도 조사 시절을 회상하다」
- 4 월 24 일(금)
스미야 카즈히코(住谷一彦, 릿쿄대학(立教大学) 명예교수)
「아오미와 하테루마지마(波照間島) 조사를 통한 우지가미 신앙(氏神信仰)의 재검토」
무라타케 세이이치(村武精一, 도쿄도립대학(東京都立大学) 명예교수)
「오키나와의 사회와 종교를 회고하며」
- 4 월 25 일(토)
우에마츠 아카시(植松明石, 전 아토미가쿠엔여자대학(跡見学園女子大学) 교수)
「사라진 섬—아라구스쿠(新城, 파나리라고도 칭함) 시모지(下地)의 화전농업에 관하여」
총괄토론

【기사 집필: 요셉・클라이너(호세이대학 특임교수)】

沖縄研究会

●日 時：2009年6月13日（土） 10時00分～16時00分

●場 所：琉球大学教育学部棟演習室

2009年6月13日（土）の10時から琉球大学教育学部棟演習室にて、「南の境界」をめぐる研究会を開催した。出席者は、沖縄県立芸術大学・安里進先生（考古学）、奄美市立奄美博物館・高梨修先生（考古学）、鹿児島大学・新里貴之先生（考古学）、琉球大学・中本謙先生（日本語学）、それに法政大学側からプロジェクトリーダーのクライナー・ヨーゼフ先生、小口雅史先生、それに本文執筆者（吉成）の合計7人。また、琉球大学の池田榮史先生（考古学）が、研究会の傍聴を希望され、傍聴のみならず、積極的に討論にも加わっていただいた。途中の休憩を含めて、6時間以上にわたって報告と討論が活発に交わされた。

クライナー・ヨーゼフ先生のこれまでの経緯などを交えながらの挨拶に引き続き、小口雅史先生から、昨年の青森での新田遺跡をめぐる「北の境界」の研究会の成果を踏まえ、「北の境界」と城久（グスク）遺跡群（喜界島）にみられる「南の境界」を、律令国家の南北の外縁として対応させて議論することが可能か、という問題提起がなされた。新田遺跡のあり方を見る限り、ローカル色が強く、中央権力に結びついた在地勢力の遺跡と考えられる一方、城久遺跡群の場合、出土遺物は外来のものであるものの、遺構などの点で貧弱であり、律令国家の出先機関として捉えるのは難しいのではないかということであった。この問題は、城久遺跡群の性格をどのように評価するかということにかかわっており、総括討論において改めて検討することになった。ただ、南北の比較の問題については、討論の過程で、即物的にみればまったく異なる様相をみせるが、国家の辺境に作用する力学という視点からみれば共通性が浮かびあがるのではないかと意見が提出された。

新里貴之先生は「琉球列島における弥生時代並行期以降の土器編年」と題して、中世並行期までの、地域

ごとの精緻な土器編年を提示された。この新里報告によって、研究者によって編年に違いがみられた弥生～中世並行期について共通する年代観にもとづく議論が可能になる土台がつくられることになった。具体的に言えば、兼久式土器編年については対立案が提出されているが、ここでは高梨編年が採用されており、これについて異論は出ず、また城久遺跡群出土土器は古代～中世に至るまで一貫して点的に異質であり、改めて城久遺跡群の琉球列島全体に占める特異性が浮き彫りにされることになったことなどである。

続いて「城久遺跡群、ヤコウガイ大量出土遺跡群、カムイヤキ古窯群からどのような歴史的展開を描くことができるか」をテーマに安里進先生、高梨修先生からの報告を得た。安里先生は、これまでの高梨先生の成果を検証するかたちでいくつかの点について、高梨先生への質問が投げかけられ、それをうける形式で高梨先生が改めてこれまでの見解を述べるとともに、安里先生の質問に回答した。安里先生からの質問は、①城久遺跡群の評価について、②奄美の兼久式土器編年について（とくに、土器編年と社会段階論の関係について）、③「ヤコウガイ大量出土遺跡」の定義について、④奄美諸島の社会段階論と琉球王権の形成について、の四つを柱とするものであった。議論が集中したのは③と④についてであり、ここではこの二点についておもに取り上げる。

高梨先生は、文献史学側から古代期に社会階層が存在していると考えられてきたが、考古学側はそれに対して対応ができなかったこと、南蛮賊人（奄美嶋の者）などの大宰府管内襲撃事件に対して「キカイガシマ」に「下知」がくだされるが、それが具体的に喜界島の城久遺跡群として姿を現したと考えられること、時代はくだるが、南北の境界の問題に関連し、北の得宗家・安東氏の新渡戸家文書と、南の得宗家・千鶴氏



研究会の様子①

の千竈家文書の様式がよく似ていることなど、文献史学側と考古学側の接点をいかに探るかを述べた後、城久遺跡群の様相について説明し、さらにグスク時代以降の沖縄諸島以南の土器文化の様相が、城久遺跡群の土器文化を模倣したものであること、それには人の移住がともなわなければ、こうした広範な変化は生じないとの見解を示した。その後、安里先生の四つの質問への回答を寄せた。

③の何をもって「ヤコウガイ大量出土遺跡」とみなすかという点については、討論において、たとえばヤコウガイの数量という連続的な値で機械的に分けようとしても、人為的な恣意的な分類にしかならず、明らかにヤコウガイをストックしているという意図が認められる場合（たとえば、数個ずつのヤコウガイが仕分けされた状況で出土するなど）は、「ヤコウガイ大量出土遺跡」と認めるべきであろうとの見解で大方の一致をみたと考える。ヤコウガイが単にたくさん出土するだけでは、それと認めないとする立場である。

また、④の問題はきわめて重要な論点であった。奄美諸島が、社会階層形成において古代～中世並行期（7世紀～12世紀）に沖縄諸島よりも優位であったとすれば、なぜ社会階層の面で遅れていた沖縄諸島で王国が形成されることになったのかという疑問である。この問いの回答として、①外的要因として、14世紀初頭の千竈家文書にみられるように奄美諸島は国家的秩序の中に組み込まれており、その秩序を維持する方向で動いたこと、②13世紀は元の活動が活発化し、東・東南アジア世界において大きな変動がもたらされた時期であり、その大きなうねりの中で国家形成の問題を考える必要があること、③②に関連して、情報に精通していた人々が国家を形成した方が交易などの面で都合がよいと判断したためではないか、などの意見が出された。ただし、この点については、沖縄諸島のグスク時代以前～グスク時代開始期の社会像をさらに明らかにしなければならない課題である。

城久遺跡群の遺物の出土状況は、8世紀後半のものも出土するが、11世紀をピークとして、12～13世紀になると薄くなる状況にあり、この12～13世紀は沖縄諸島においてグスク時代が本格化し、やがて13世紀には大型グスクなどもつくられた時代であっ

た。したがって、城久遺跡群の盛衰の年代と沖縄諸島のグスク時代は、よく対応していることになり、城久遺跡群からの沖縄諸島への南下を想定する論者には、その傍証になりうる。その場合、12～13世紀に城久遺跡群で何が起こったのかが問題として残される。

沖縄諸島が主体になって弥生時代から九州にゴホウラ、イモガイの供給を行い、やがてヤコウガイの供給などを行っていたとする議論について、2007年2月に奄美大島で行った研究会（奄美市立奄美博物館）における新里貴之先生の報告は、ゴホウラ、イモガイの交易は奄美諸島を中継地とした交易ネットワークを想定しており、また、その後の討論においてもゴホウラやイモガイの集積遺跡があること自体、それらは需要がなかったため捨て置かれたものであって、沖縄諸島は交易の末端に位置づけられていたのではないかと意見が出されていた。

城久遺跡群の性格について、遺物と遺構のギャップが大きすぎ、それをどのように把握すべきか、という問題が最後まで残された。遺構の貧弱さは行政の末端に位置づけられていたとは考えにくいということである。しかし、城久遺跡群は、この遺跡群がある台地上に存在する遺跡群のごく一部にすぎず、台地上全体が防御的な遺跡群を形成しているとみなすべきであること、また南蛮賊人の大宰府管内襲撃事件が起こった際、「キカイガシマ」に「下知」がくだされた事実を勘案すれば、その場所として第一に考えられるのは喜界島の台地上の遺跡であろうとの意見が要約するかたちで提出された。したがって、現時点においては、史料を裏づける物証とみなしうる反面、資料論として問題が残るが、城久遺跡群を含む広大な遺跡群は、何らかの行政組織の末端に位置づけられていたのではないかという見解が有力になったと考える。

なお、琉球語祖語の流入時期の問題について、中本謙先生は、琉球語の八行子音p音はこれまで考えられていたよりもかなり新しい可能性が高く、グスク時代開始期頃における北からの集団の移動を想定する考えと矛盾しないとの考えを示されている。

【記事執筆：吉成 直樹】

（法政大学沖縄文化研究所専任所員・教授）



研究会の様子②

Research Report Meeting

Academic Frontier Sub-project 3: “Other Cultures within Japan”

Okinawa Research Meeting

Date Saturday, 13 June 2009, 10:00-16:00

Venue Seminar Room, Faculty of Education Building, Ryūkyū University

A research meeting titled “Southern Boundaries”, one of the themes of sub-project 3: “Other Cultures within Japan”, was held from 10:00 on Saturday, 13 June 2009 at the Faculty of Education Building of Ryūkyū University. It took its form in response to last year’s “Northern Boundaries” research meeting which concerned the Nitta Remains in Aomori. Reports and discussion focused on the connection in the nature of the Gusuku group of excavations (c. 9-13th century) of Kikajima in the Amami

Islands with the later Gusuku period (12th century-) which began on the Okinawa Islands. The fact that the Gusuku excavations are poor in comparison with numerous overseas unearthened remains posed the question whether they are in fact remains linking to the end of a nation state. This would provide a material source to support the historical documentation, although there would still be problems in the theory of evidence. However, at the conclusion of discussions, the opinion gained strength that the wider group of excavations, which include the Gusuku group, constitute the end of some kind of administrative organization. Also, there are prospects for the Gusuku group of excavations having played a large role in the beginnings of the Gusuku period south of the Okinawan Islands.

Report by: YOSHINARI Naoki (Professor, Special Advisor, Institute of Okinawan Studies, Hosei University)

研究会報告

学术开拓推进项目③日本内部的异文化

冲绳研究会

时 间：2009年6月13日（周六）10：00-16：00

地 点：琉球大学教育学部楼演习室

2009年6月13日（周六）上午10：00，作为学术开拓推进项目③“日本内部的异文化”研究课题之一的“南方的边界”研究会在琉球大学教育学部楼召开。此次研究会在形式上与去年围绕着青森的新田遗迹召开的“北方的边界”研究会相同，主要就位于奄美诸岛的喜界岛上的城久（古琉球）遗迹群（公元9世纪-13世纪）的本质特征，以及其与此后发源于冲绳诸岛的古琉球时代（公元12世纪-）之间的关联，进行集中性的

报告・讨论。在研究会的讨论中，有人提出，由于在城久遗迹群中，与出土遗物中的大量外来物品相比，建筑物的遗迹十分贫乏。因此，就这一现象来看，城久遗迹群是否的确是国家的基层组织相关联的建筑物的遗迹，这一点值得怀疑。对此，研究会讨论的结果是，城久遗迹群一方面能够作为印证史料的物证，但另一方面从资料论的角度来看也的确存在一些问题。尽管如此，包括城久遗迹群在内的庞大的遗迹群是某些基层的行政组织的见解最终还是占据了上风。同时，研究会还推测认为，城久遗迹群在冲绳诸岛以南的古琉球时代的发端过程中也起到了重要的作用。

【执笔者：吉成 直树

（法政大学冲绳文化研究所专任所员・教授）】

연구회 보고

학술프론티어·서브 프로젝트③ 일본 속의 이문화

오кина와 (冲绳) 연구회

・일 시 2009년 6월 13일 (토) 10시 00분~16시 00분

・장 소 류큐대학 (琉球大学) 교육학부동 세미나실

서브 프로젝트③「일본 속의 이문화」의 연구테마 중, 「남부 경계지역」에 관한 연구회가 2009년 6월 13일 (토) 10시부터 류큐대학 (琉球大学) 교육학부동에서 개최되었다. 지난 해에는 「북부 경계지역」과 관련해, 아오모리 (青森) 의 니타 (新田) 유적에 관한 연구회가 개최되었는데, 올 해에도 그에 대응하는 형식으로 진행되었다. 즉, 아마미제도 (奄美諸島) 의 기카이시마 (喜界島) 에 있는 구스쿠 유적군 (城

久遺跡群, 9세기~13세기 경) 의 성격과, 그 후 오키나와제도에서 시작된 구스쿠시대 (12세기~) 와의 관련에 관해 집중적으로 보고·검토되었다. 그 결과, 구스쿠 유적군 (城久遺跡群) 은 다량의 외래 유물이 출토된 것과는 대조적으로 유구 (遺構, 옛 건물의 흔적) 가 빈약한 점 등으로 미루어 볼 때, 과연 국가의 말단에 귀속되었던 유구로 볼 수 있는가 하는 의문이 제기되었다. 그러나, 토론 결과, 구스쿠 유적군 (城久遺跡群) 은 자료론상의 문제점이 남아 있기는 하지만, 사료 (史料) 를 뒷받침하는 물증으로 볼 수 있기 때문에, 구스쿠 유적군 (城久遺跡群) 을 포함한 광대한 유적군은 뭔가의 행정조직의 말단에 위치했던 것이 아닐까 하는 견해가 유력했다. 또한, 구스쿠 유적군 (城久遺跡群) 은 오키나와제도 이남에서 구스쿠시대가 시작됐을 때에도 지대한 역할을 담당했을 것으로 전망되었다.

【기사 집필: 요시나리 나오키 (吉成 直樹,

호세이대학 오키나와연구소 전임소원・교수)】

2009 年度第 1 回東アジア文化研究会

「国際文化交流の評価研究 — 異文化理解の手がかりとして —」

岡本真佐子 (桐蔭横浜大学スポーツ
健康政策学部教授)

- 日 時：2009 年 4 月 22 日 (水) 18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

国際文化交流は、パブリック・ディプロマシーの重要性が指摘される中で、あらためてその意味や役割が問われている。しかし、その活動を評価する方法は諸外国においても、日本においても、模索の途上にある。日本の国際文化交流を担う主要な機関である独立行政法人国際交流基金は、1972 年に設立され、2003 年に独立行政法人に移行し、それにとまってその評価の実施が制度的に義務付けられることとなった。現在、共同の研究チームで国際文化交流の評価手法を開発する研究を実施しつつあり、2006 年には韓国において、また 2008 年からはドイツにおいて、調査票およびインタビューによる調査を行った。

評価調査実施の経緯と調査結果からは、いわゆる事業の評価というものを超えて、対象となる社会、文化を理解する手がかりを数多く読み取ることができる。こうした事業評価の手法と分析については未だ研究途上ではあるものの、これまでの調査結果をもとに、文化交流という視点から垣間見える文化間関係を探り、異文化理解の手がかりとして評価調査研究結果を分析することができると思われる。

本報告では、まず韓国およびドイツにおける調査概要 (実施時期、地域、調査方法、データ数等) を示したうえで、調査票設計のアイデア、分析デザイン、多様な調査手法の総合といった調査実施上の手続きやプ

ロセスを紹介し、評価調査研究の基盤にある基本的な考え方について述べた。それは、①個別事業に対する狭い意味での評価 (満足したかどうか等) だけではなく、調査対象社会の人々の関心や行動の側面 (国際交流基金や日本について知っている、事業等に参加している等) と態度の側面 (国際交流基金や日本について好きである、評価している)

との相関をとらえる等、より広い意味での評価をめざすこと、②国際文化交流活動の結果として生じる、「意図した結果」だけでなく「意図せざる結果」をできるだけ把握、推論すること、③調査票のバックトランスレーションを初めとして、問文化的な「等価性」に留意すること、④異なる調査方法を単に組み合わせるだけでなく総合することにより、それぞれの調査方法の短所を補い、より調査対象社会の現実に即した調査結果の解釈や、中長期的な変化のプロセスや事業間のシナジー効果の把握等を行う、といった点である。

続いて韓国およびドイツにおける調査の具体的な結果をもとに、両国の「関心や行動の側面：involvement」と「態度の側面：attitude」との間に見られる全体的な傾向、ならびにいくつかの注目すべき結果について報告した。全体的な傾向としては、韓国ならびにドイツの人びとの国際交流基金への「かかわり合い (involvement)」が、一方ではそれが契機となって日本への「かかわり合い」の機会をもたらすことになるとともに、他方ではそれによって日本への「ポジティブな意識 (単に「好感度」が高まるということだけでなく、対象の他者性をそれなりに正当に評価しようとする志向性が育ってくるというようなことを含めて)」が生まれてくるということが確かめられた。

また個別の調査票データ分析やインタビュー調査結果等からは、たとえば韓国では年代によって、日本に対する好感度を素直に表明できない傾向が見られたり、ドイツにおいては日本語学習者の対日好感度は、学習レベルが上がっても単純に高くなるわけではなく、年代による好感度の差が大きいといったことを紹介した。このような結果を解釈するに際しては、韓国とドイツにおける日本文化受容の状況、語学学習の上達に関わる (ドイツ) 特有の難しさ、日韓、日独の歴史的関係等を考慮する必要があり、データの解釈と分析を通して、韓国社会、ドイツ社会を異文化として理解するための手がかりが数多く見出された。

国際文化交流の評価調査研究は、調査手法を開発するプロセスそのものが異文化理解のプロセスであるとともに、調査結果の解釈や分析を通して調査対象社会の文化を理解する手がかりが得られ、それが調査手法開発にフィードバックされていくという循環的なプロセスでもある。

【記事執筆：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)
及川 淳子
(法政大学国際日本学研究所客員研究員)】



研究会の様子



岡本真佐子 氏

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

1st East Asian Culture Research Meeting of 2009

“Research Evaluating International Cultural Exchange: a Key to Under- standing Other Culture”

Speaker OKAMOTO Masako (Professor, Tōin Uni-
versity of Yokohama, Faculty of Culture
and Sport Policy)
Date Wednesday, 22 April 2009, 18:30-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus, '58
Building 2F Research Center for Interna-
tional Japanese Studies Seminar Room
Chair WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japa-
nese Studies)

Methods of evaluating international cultural ex-

东亚文化研究会报告 学术开拓推进项目②作为异文化的日本 2009 年第 1 次东亚文化研究会 “国际文化交流的评价研究 — 实现异 文化理解的线索”

报告人：冈本真佐子（桐荫横滨大学体育健康政
策学部教授）
时 间：2009 年 4 月 22 日（周二）18：30-20：30
地 点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日本
学研究所研究室
主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

目前，世界各国和日本都在探索如何对国际文化交
流活动进行评价。在日本，承担着国际文化交流职能的
独立行政法人国际交流基金也一直在进行着相关研究，

동아시아문화연구회 보고 학술프론티어·서브 프로젝트② 이문화로 서의 일본 2009 년도 제 1 회 동아시아문화연구회 「국제문화교류에 대한 평가연구 — 이 문화 이해의 척도로서 —」

· 보고자 오카모토 마사코 (岡本真佐子, 토인
요코하마대학 (桐蔭横滨大学) 스포츠
건강정책학부 교수)
· 일 시 2009 년 4 월 22 일 (수) 18 시 30 분 ~
20 시 30 분
· 장 소 호세이대학 이치가야 (市ヶ谷)
캠퍼스 58 년관 2 층 국제일본학연
구소 세미나실
· 사 회 왕 민 (王 敏, 호세이대학 국제일본
학연구소 교수)

국제문화교류 활동을 평가하는 방법은 외국에 있어
서나 일본에 있어서나 아직 탐색 중에 있다. 일본 국

change activities are under exploration overseas as well
as in Japan. Advocator of international cultural exchange
in Japan, the Japan Foundation, is presently involved in
putting into practice research that develops evaluation
methods for international cultural exchange. In 2006 it
carried out inquiries in Korea, and since 2008 investiga-
tions have been made in Germany.

This research paper reported on several notable in-
quiry results, as well as explaining the basic approaches in
the two countries towards inquiry briefs, ideas and de-
signs in questionnaire planning, and various common in-
quiry methods. Investigative research in evaluating inter-
national cultural exchange is a process of developing
inquiry methods, and that, in itself, is a process of under-
standing other culture. In addition to this, by explaining
and analyzing inquiry results we find a key to understand-
ing the society and culture of the country in question, so it
is, in turn, a cyclical process which provides feedback for
inquiry method development.

Report by: WANG Min (Professor, Hosei University Re-
search Center for International Japanese Studies);
OIKAWA Junko (Guest Scholar, Hosei University Re-
search Center for International Japanese Studies)

力图开发出一套更为科学合理的国际文化交流评价方
法。为此，国际交流基金于 2006 年和 2008 年分别在韩
国和德国展开了调查。

在此次研究会上，冈本真佐子教授对上述调查活动
的概要、调查问卷的创意和设计、多种调查方法的综合
运用等情况进行了详尽的说明，并就上述调查活动的基
本思路和若干值得注意的调查结果进行了深入的分析。
在针对国际文化交流评价方法进行调查研究时，开发调
查方法的过程实际上也正是异文化理解的过程。同时，
通过对调查结果的解释和分析，也能从中获得理解调查
对象社会文化的线索。而这些线索又将反馈到调查方法
的开发之中，从而最终形成一种良性循环。

【执笔者：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）
及川 淳子
（法政大学国际日本学研究所客员研究员）】

제문화교류를 담당하고 있는 독립행정법인 국제교류
기금은 현재, 국제문화교류의 평가 방법 구축을 위한
연구를 계속하고 있는데, 2006 년에는 한국에서 조사를
실시했으며, 2008 년부터는 독일에서 조사를 진행
하고 있다.

본 보고에서 오카모토씨는 한국과 독일에서 실시된
조사의 개요와, 조사표 설계의 아이디어 및 디자인,
다양한 조사방법의 체계화 등에 관한 기본적인 운영
방침을 제시하고, 몇몇 주목할 만한 조사결과를 보고
했다. 국제문화교류의 평가조사연구는 조사방법을 개
발하는 과정 그 자체가 이문화 이해의 과정이라 할 수
있다. 동시에, 조사결과와 해석과 분석을 통해서 조
사 대상이 된 사회의 문화를 이해하는 데에 필요한 단
서를 얻을 수 있으며, 그러한 결과가 역으로 조사방법
개발을 위한 피드백을 제공하는, 순환적인 프로세스
이기도 하다.

【기사 집필 : 왕 민 (王 敏,
호세이대학 국제일본학연구소 교수)
오이카와 준코 (及川 淳子,
호세이대학 국제일본학연구소 객원연구원)】

2009 年度第 2 回東アジア文化研究会

「漢文力と日本の近代」

佐藤 保 (お茶の水女子大学名誉教授・
学校法人二松学舎顧問)

- 日 時：2009 年 5 月 19 日 (火) 18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

「漢文力」とは、中国語の文語（文言）文を日本語訓読法によって読みくだし、逆にまた、日本人が中国語の文語文で自分の意志や考えを表現できる能力をいう。すなわち、本来は外国語である中国文語文を日本語として自在に使いこなす力が「漢文力」である。その基礎は言うまでもなく訓読法であり、一般に、訓読が可能な文体、あるいはそのような文体で表現される作品そのものを、われわれは「漢文」と呼ぶ。

東アジア漢字文化圏では、日本以外の朝鮮やベトナムなどにもそれぞれの国語による訓読法が存在した（存在する）。いずれの国においても、中国の学術・文化を受容する過程で訓読法はさまざまな工夫が加えられて定着したもので、日本の場合は日本漢学や日本漢文学が最盛期を迎えた江戸時代に、今日通行する訓読の形ができあがった。

訓読を基礎とする漢学・漢文教育も江戸時代に最盛期を迎えた。幕府の学問所である昌平黉をトップに、各藩の藩校、漢学者や漢詩人たちの私塾・寺子屋などで、武士から庶民に至るまで幅広い層の人々が漢文を学び、日本人の「漢文力」は最高潮に達した。

明治になると、国家の教育方針をめぐる国学派・漢学派・洋学派の間で激しい主導権争いがくり広げられたが、結局、洋学派が勝利を得た。そのような風潮の中で、なお東洋の精神・倫理観を守るべしとする漢学派の私塾が各地に創られて、漢学・漢文教育は続けられた。例えば、三島中洲が明治 10 年（1877）10 月に創設した漢学塾二松学舎は、開学当時のカリキュラムを見ると、初歩（三級）・中級（二級）・上級（一級）の各級が、さらに第三課から第一課まで細分されていて、それぞれの課程で学ぶ書物がこと細かにきめられていた。そこから江戸時代以来の伝統的な漢文教育の実態と、「漢文力」の継続を知ることができる。明治初期の漢学塾と漢詩・漢文の結社（詩社、文社）については、例えば木下彪『明治詩話』（文中堂・1943 年）などに詳しい。



報告者 佐藤 保 氏



研究会の様子

「日本の近代」は、長年の鎖国

をといて国際舞台に登場した日本が、列強と肩を並べる強力な国家を作ることになった。いわゆる富国強兵策である。そのためには海外事情と新知識を吸収することが急務であった。幕末から明治にかけて刊行された「官板海外新聞」（文久 2 年〈1862〉3 月刊）や「西洋雑誌」（慶應 3 年〈1867〉10 月刊）などは、海外の事情を伝える新聞・雑誌のごく一部である。

ところで、当時の日本人がこれらの情報源どこ（なに）から得たかといえば、意外にも漢訳（中国語訳）文献から得たものが決して少なくなかった。もちろん、その頃でも欧米の言葉を理解する人がいなかったわけではない。鎖国中に長崎まで行ってオランダ語の習得に努力した人をわれわれは多く知っているし、幕末に海外に派遣された留学生もいたのであるが、しかし、情報の多くは中国語に翻訳された欧米の文献と中国人の著述によって得たものの方がはるかに多い。このような中国語の文献であれば、「漢文力」のゆたかな当時の日本人は、読解にさほど苦しむことはなかったのである。この辺の事情の先駆的な研究は、中山（中村）久四郎の「近世支那より維新前後の日本に及ぼしたる影響」（史学会編『明治維新史研究』所収、富山房・1929 年）と「近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響」（『史学雑誌』第 25 編第 2 号、1914 年 2 月）である。中国では、梁啓超の『西学書目表』（洋務報館、光緒廿二年〈1896〉）がある。

一例を挙げれば、『西学書目表』（中巻）「法律」の項に、米国・惠頓（Weaton）著、丁韪良（W. P. A. Martin）訳の『万国公法』以下 13 点の書物が著録されているが、この『万国公法』は国際法の文献として、当時、中国や日本で広く読まれた書物であり、慶應元年（1865）には幕府の開成所から和刻本が出版された。いま、国立公文書館（旧内閣文庫）をはじめ大学図書館等、多くの図書館・研究機関に所蔵されている。

「漢文力」が「日本の近代」に役だったもう一つの例は、外交分野における例である。最初の清国外交団が来日したのが明治 10 年（1877）の年末、近代になって初めて学殖ゆたかな中国知識人を迎え、まずは日本の漢学者や漢詩文作家たちは欣喜雀躍した。その際にお互いの意思疎通に用いられたのが漢文による筆談であった。筆談は文人たちの余暇の閑談にとどまらず、正式な外交の場において用いられることも決して少なくなかった。

漢学者が外交の場で一種の通訳の役割を演じたのは、これ以前にも朝鮮通信使との交渉の場に漢学者が加わることがあったのであるが、これは東アジア漢字文化圏の国々が漢字による共通の学術・文化をもっていたからこそ話して、さながら「漢文」がある種の国際共通語としての機能を有していたことを知るのである。

【記事執筆：佐藤 保
（お茶の水女子大学名誉教授・学校法人二松学舎顧問）】

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

2nd East Asian Culture Research Meeting of 2009 "Kanbun Ability and Japan in the Modern Age"

Speaker SATO Tamotsu (Emeritus Professor, Ochanomizu University; Adviser, Nishōgakusha)
Date Tuesday, 19 May 2009, 18:30-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

"Kanbun ability" describes the skill of Japanese people at reading Chinese literary texts following Japanese

language rules, and expressing their own ideas and intent in written Chinese. This transforming of Chinese for use in Japanese – Kanbun ability – reached its peak in the Edo period, when Japanese study of the Chinese classics flourished. In the Meiji period the Western literature school decided the course of national education, although private academies were set up in many areas by the Chinese literature school, and the level of Kanbun ability remained high. Upon this background we see how Chinese translations of European and American literature and Chinese writings could have assisted in the absorption of new foreign knowledge for Japan's "modernization". For Japanese people at that time, with their great Kanbun ability, Chinese would have been easy to understand.

Another example of the role of Kanbun ability in Japan's modern age is in the area of diplomacy. In order to communicate with the Qing Dynasty diplomatic mission, the written communication method of Kanbun was used as an international common language.

Report by: SATO Tamotsu (Emeritus Professor, Ochanomizu University; Adviser, Nishōgakusha)

东亚文化研究会报告 学术开拓推进项目②作为异文化的日本 2009年第2次东亚文化研究会 “汉文力与日本的近代”

报告人：佐藤 保（御茶水女子大学名誉教授・学校法人二松学舎顾问）
时 间：2009年5月19日（周二）18:30-20:30
地 点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日本学研究所研究室
主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

所谓“汉文力”，是指日本人运用日语训读法来阅读中国的文言文的能力和运用中国的文言文来表达自己的意志和想法的能力。这种将中文转化为日语的“汉文力”在日本汉学、日本汉文学最为兴盛的江户时代达到

最高潮。在进入明治时代后，尽管“洋学派”在教育方针中取得了胜利，但是由于“汉学派”在日本各地创办了大量私塾，因此，当时日本人的“汉文力”依然保持在很高的水平。在这样的背景下，翻译为中文的欧美文献资料和中国人的论著在日本从海外吸收新知识，实现“近代化”的过程中，发挥了巨大的作用。这主要是因为中文的文献资料对于当时“汉文力”颇高的日本人而言，比其他国家语言容易理解得多。

“汉文力”在“日本的近代”发挥了巨大作用的另一个例子就是在外交领域。当时的日本外交官在与清国代表团进行交流沟通时，双方都是将“汉文”作为国际共通语而进行“笔谈”。

【执笔者：佐藤 保

（御茶水女子大学名誉教授・学校法人二松学舎顾问）】

동아시아문화연구회 보고 학술프론티어·서브 프로젝트② 이문화로서의 일본 2009년도 제2회 동아시아문화연구회 「한문 능력과 일본근대」

· 보고자 사토 다모츠(佐藤 保, 오차노미즈여자대학(お茶の水女子大学) 명예교수·학교법인 학교법인 니쇼가쿠샤(二松学舎) 고문)
· 일 시 2009년 5월 19일(화) 18시 30분 ~ 20시 30분
· 장 소 세이대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
· 사 회 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

「한문 능력」이란 일본인이 중국어 문어<문언>문(文語<文言>文)을 일본어 훈독법(訓読法)에 따라서 읽거나, 중국어 문어문으로 자신의 의사나 생각을 표현하는 능력을 의미한다. 중국어를 일본어로 전환해서 사용하는「한문 능력」이 최고조에 달한

것은, 일본한학이나 일본한문학이 최성기를 맞이했던 에도(江戸) 시대였다. 메이지(明治) 시대에 들어서서는, 국가의 교육방침에 있어서는 양학과(洋学派)가 득세를 하였으나, 여전히 한학과(漢学派)의 사숙(私塾, 사설 교육기관)이 도처에 개설되어「한문 능력」은 이전과 다름없이 높은 수준을 유지하고 있었다. 이러한 배경하에서「일본의 근대」화를 위해 해외의 신지식을 흡수하는데 큰 역할을 담당한 것이 중국어로 번역된 구미(歐米)의 문헌과 중국인의 저술이었다. 「한문 능력」이 풍부했던 당시의 일본인들은 중국어로 쓰여진 서적을 용이하게 이해할 수 있었기 때문이다.

「한문 능력」이「일본근대」에 공헌한 또 다른 예로 외교분야에서의 공적을 들 수 있는데, 청국(淸國) 외교단과의 의사소통에 사용된 것 또한 국제 공통어로서의 한문 필답이었다.

【기사 집필: 사토 다모츠(佐藤 保, 오차노미즈여자대학(お茶の水女子大学) 명예교수·학교법인 니쇼가쿠샤(二松学舎) 고문)】

2009 年度第 3 回東アジア文化研究会

東アジアにおける「阿Q」像の系譜： 夏目漱石、魯迅そして村上春樹

A Genealogy of the Ah Q Image in East Asian Literature: Natsume Sōseki, Lu Xun, and Murakami Haruki

藤井 省三（東京大学文学部教授）

- 日 時：2009 年 6 月 12 日（金）18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 25 階B会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

魯迅（1881-1936）は日本文学に大きな影響を与えており、その最たるものが「阿Q」像の系譜である。「阿Q」像とは通常の名前を持たず、家族から孤立し、旧来の共同体の人々の劣悪な性格を一身に集めて読者を失笑苦笑させたのち犠牲死して、旧共同体全体の倫理的欠陥を浮き彫りにし、読者を深い省察に導く人物である。

「阿Q」像の原型を魯迅はおそらく漱石の『坊っちゃん』（一九〇六）に見いだしたことであろう。『坊っちゃん』の語り手は名前を持たず、「下女」の清を除く誰とも心の通い合う対話ができない。漱石は「坊っちゃん」の自閉性と周囲の人物の一見常識的対応との落差を描いて読者を失笑苦笑させながら、日露戦争後に成立した大日本帝国という国民国家の国民性を批判しているのである。この漱石作品では「坊っちゃん」は犠牲死こそしないものの、彼に替わるかのように清が急死している。これに対し魯迅の「阿Q正伝」は村と县城における辛亥革命の到来と、その犠牲となる阿Qを描いて、さらに鋭い国民性批判を展開したのである。

村上春樹（一九四九～）は高校時代に魯迅を愛読していたようである。デビュー作『風の歌を聴け』（一九七九）冒頭の一節「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね」とは、魯迅が散文詩集『野草』に記したことば「絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい」に触発さ

れたものであったろう。村上の最初の短篇小説「中国行きのスロウ・ボート」と魯迅の自伝的小説「藤野先生」とは、遠い街で外国人の先生の希望を裏切ったことに対する罪の意識という構成とテーマを共有しているのである。

このように村上と魯迅とは深い絆で結ばれており、とくに「阿Q」像は村上が魯迅から継承した主要なテーマである。たとえば村上は『若い読者のための短編小説案内』（一九九七）で本格的文芸批評を試みた時、阿Qに触れて鋭い批評を語っている。そもそも村上には「Q氏」を主人公とする「駄目になった王国」（一九八二）という短篇小説がある。語り手の「僕」によれば、彼の旧友のQ氏は好人物で欠点だらけの日雇い農民「阿Q」とは対極である。しかし一〇年後に「僕」が再会するQ氏が、テレビ局の「ディレクターのような職」にありながら、市民的倫理も感性も失っているようすを読むとき、魯迅の読者はQ氏とは紛れもなく「阿Q」像の系譜に連なる人物であることに気づくであろう。

村上春樹はその後もQ氏の兄弟たちを描き続けている。たとえば『ダンス・ダンス・ダンス』（一九八八）に登場する映画スターの五反田君は、虚像を演じるのに疲れたQ氏でもあり、「無意味で卑劣なことをやることによってやっと自分自身が取り戻せる」ほどに高度経済成長からバブル経済へと至る日本社会の急激な



藤井省三 氏



研究会の様子

変化の中で病んでいる。

一九九四年のノモンハン事件（一九三九）の戦場取材旅行をめぐる旅行記では、侵略の結果として敗戦を経験しながら、「自分の内なるものとしての非効率性」を深く問うことなく、単なる「外科手術」により物理的に「非効率性」を排除して高度経済成長を迎え、ポストモダン社会へと突入して、結局は「名もなき消耗品として静かに平和的に抹殺」されている日本人に対し、根本的な疑問を提起している（『辺境・近境』）。そしてこのような村上の思考は『ねじまき鳥クロニクル』第三部として結実したといえよう。この物語において語り手で主人公でもある「オカダトオル」は、幽霊の阿Qから「本当の人」（『狂人日記』）へと生まれ変わろうとして闘っているのではあるまいか。

魯迅は伝統的帝国の清朝から近代の国民国家としての中華民国、そして中華人民共和国へと中国が大変貌を遂げる際に、主体的に変革に参加しない膨大な群

衆、あるいは参加しようにも参加できない過去の幽霊のような人々を、厳しくしかし共感を抱きつつ阿Qとして描き出し、新しい時代の国民性を模索した。村上春樹も戦後日本の中産階級を中心とする「市民社会」や、エリート・サラリーマンを核とするポストモダン社会に対し、「阿Q」像を援用しながらラディカルな批判を行ってきたといえよう。

二〇〇八年夏の金融恐慌を引き金に、“ポストモダンの終わり”が始まろうとしている。このような大転換期に際し、村上春樹が八〇年代のモダンからポストモダンへの転換期に行った深い省察を出発点として現在まで続けてきた文学活動は注目に値するものであり、彼の最新作『1Q84』にも阿Qの姿が影を差しているのである。

【記事執筆：藤井 省三（東京大学文学部教授）】

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

3rd East Asian Culture Research Meeting of 2009

“A Genealogy of the Ah Q Image in East Asian Literature: Natsume Sōseki, Lu Xun, and Murakami Haruki”

Speaker FUJII Shōzō (Professor, Faculty of Letters, University of Tokyo)
Date Friday, 12 June 2009, 18:30-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
Chair WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

LU Xun (1881-1936) might well be described as the father of modern Chinese literature. The “Ah Q” image he invents in *The True Story of Ah Q* (1922) does not have

a common name; he isolates himself from his family, embodies all the inferior nature of people of the conventional society, and, after giving the reader various reasons for wry smiles, dies a victim. He is a character who reveals the moral flaws in the old society as a whole, and encourages the reader to reflect deeply within him or herself. Lu Xun more than likely discovered a model for the Ah Q image in Natsume Sōseki (1867-1916)'s *Botchan* (1906), a work of literature criticizing the national character of Meiji Japan.

The Ah Q image has much influence upon modern Japanese literature. Murakami Haruki (1949-) is said to have enjoyed reading Lu Xun since his high school days, and since his debut in 1979 – including in his new publication this summer – has portrayed the “Ah Q”s in Japan's transitions from the modern to post-modern, and from post-modern to the end of post-modern. Could it even be the ghost of Ah Q hovering in his recent work, *1Q84*? This paper given at the research meeting thus traced the genealogy of the Ah Q image in East Asia, while considering the role of literature at the end of the post-modern era.

Report by: FUJII Shōzō (Professor, Faculty of Letters, University of Tokyo)

东亚文化研究会报告

学术开拓推进项目②作为异文化的日本

2009 年第 3 次东亚文化研究会

“东亚的‘阿Q’形象之系谱：夏目漱石、鲁迅以及村上春树

A Genealogy of the Ah Q Image in East Asian Literature: Natsume Sōseki, Lu Xun, and Murakami Haruki”

报告人：藤井 省三（东京大学文学部教授）

时 间：2009 年 6 月 12 日（周五）18：30-20：30

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 25 层 B 会议室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

被誉为“中国现代文学之父”的鲁迅（公元 1881-1936 年）在《阿Q 正传》（公元 1922 年）中刻画的“阿

Q”，既是一个没有和平常人一样的名字，被家人所抛弃，集旧时代人们的所有劣根性于一身，引得读者为之失笑苦笑的人物形象，又是一个最终悲惨死去，折射出旧时代人们整体的伦理性缺陷，令读者为之陷入深思反省的人物形象。而鲁迅笔下的这样一个“阿Q”形象的原型，恐怕还是来自于夏目漱石（公元 1867-1916 年）创作的明治时代日本的国民性批判文学《哥儿》（公元 1906）。

“阿Q”的形象同样也给现代日本文学带来了巨大的影响。村上春树（公元 1949-）从高中时期就酷爱鲁迅文学。从 1979 年发表的首部作品，直至今年夏天发表的最新作品，村上春树用自己的笔描绘了处于从现代到后现代、从后现代到后现代终结的转换期之中的日本社会之“阿Q”群像。就在村上春树的近作《1Q84》中，“阿Q”的幽灵仿佛仍在不停徘徊。此次研究会在回溯东亚的“‘阿Q’形象之系谱”的同时，也对处于后现代终结期的文学的作用进行了考察。

【执笔者：藤井 省三（东京大学文学部教授）】

동아시아문화연구회 보고

학술프론티어·서브 프로젝트② 이문화로서의 일본

2009 년도 제 3 회 동아시아문화연구회 「동아시아에서의 「阿Q」 상 (像) 의 계보 : 나츠메 소세키 (夏目漱石), 루쉰 (魯迅) 그리고 무라카미 하루키 (村上春樹)

A Genealogy of the Ah Q Image in East Asian Literature: Natsume Sōseki, Lu Xun, and Murakami Haruki」

- 보고자 후지이 쇼조 (藤井 省三, 도쿄대학 (東京大学) 문학부 교수)
- 일 시 2009 년 6 월 12 일 (금) 18 시 30 분 ~ 20 시 30 분
- 장 소 호세이대학 (法政大学) 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스
- 사 회 왕 민 (王 敏, 호세이대학 국제일본 학연구소 교수)

현대중국문학의 아버지라 할 수 있는 루쉰 (魯迅, 1881~1936) 이 「阿Q 正伝」 (1922) 에서 묘사

한 「阿Q」는, 통상적인 이름이 부여되지 않고, 가족으로부터 고립되었으며, 종래의 공동체 사람들이 갖고 있던 열악한 성격을 한몸에 지닌 채, 독자들의 실소와 고소를 자아낸다. 그 후 그는 희생사 (犠牲死) 를 통해, 구 공동체 전체의 윤리적 결함을 뚜렷이 드러내 보임으로써, 독자들을 깊은 성찰로 이끌게 되는 인물이다. 이러한 「阿Q」상 (像) 의 원형을, 루쉰은 필시 나츠메 소세키 (夏目漱石, 1867~1916) 가 저술한, 메이지 (明治) 시대 일본의 국민성 비판 문학인 『도련님』 (1906, 원 제목은 『坊っちゃん』) 에서 발견했을 것이다.

이러한 「阿Q」상 (像) 은 현대일본문학에도 큰 영향을 주었는데, 고교시절부터 루쉰의 작품을 애독한 것으로 보이는 무라카미 하루키 (村上春樹, 1949~) 는 1979 년에 데뷔한 이래, 아마도 올 여름 발표된 신작에 이르기까지, 모던에서 포스트모던으로, 포스트모던에서 포스트모던의 종언으로 향하는 전환기 일본의 「阿Q」들을 그리고 있다. 최근 작품인 『1Q84』에서도 「阿Q」의 유령이 방황하고 있는 것은 아닐까. 본 보고는 이와 같은 동아시아의 「阿Q」상 (像) 의 계보」를 더듬어, 포스트모던 종언기에 있어서 문학의 역할을 고찰하고자 한다.

【기사 집필 : 후지이 쇼조

(藤井 省三, 도쿄대학 (東京大学) 문학부 교수)】

フランソワ・マセ教授の研究所訪問

●日 時：2009年2月20日（金）16時00分～18時00分

●場 所：法政大学国際日本学研究所

パリの国立東洋文化言語学院（INALCO）教授で昨年のアルザス・シンポジウムにも参加して下さった日本古代史のマセ教授が来日され、2月20日（金）には研究所で、同教授と、所長安孫子、所員小口との間で懇談の機会が持たれました。日本古代史での日欧研究者の研究協力のあり方、また INALCO と国際日本学研究所、さらには法政大学との将来の協力関係の確立などをめぐって、有意義な意見交換が行われました。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）】



左から小口教授、フランソワ・マセ教授、安孫子所長

Visit to Center by Professor François Macé

Date Friday, 20 February 2009, 16:00-18:00
Venue Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Professor of ancient Japanese history at Institut National des Langues et Civilisations Orientales (INALCO) in Paris, and participant at last year's Alsace symposium, Professor Macé was visiting Japan, and this provided an opportunity for a meeting between him and the Director, Professor Abiko and staff appointee, Professor Oguchi at

the Center on Friday, 20 February. There was a worthwhile exchange of opinions relating to methods of shared research between Japanese and European researchers in ancient Japanese history, and also about establishing future cooperation etc. between INALCO and the Research Center for International Japanese Studies, and furthermore Hosei University as a whole.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于弗朗索瓦・梅斯教授访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间：2009年2月20日（周五）16：00-18：00
地 点：法政大学国际日本学研究所

2009年2月20日（周五），巴黎国立东洋文化语言学院（INALCO）教授弗朗索瓦・梅斯对法政大学国际日本学研究所进行了访问，并与所长安孙子、所员小口举

行了会谈。弗朗索瓦・梅斯教授是日本古代史研究领域的专家，曾参加过去年的阿尔萨斯研讨会。在会谈中，双方围绕着如何加强日欧研究者在日本古代史领域的合作研究、如何确立 INALCO 与国际日本学研究所以及法政大学在未来的合作关系等问题深入地交换了意见。

【执笔者：安孙子 信

（法政大学国际日本学研究所所長・文学部教授）】

프랑소아・마세 교수 연구소 방문

・일 시 2009년 2월 20일（금）16시 00분～18시 00분
・장 소 호세이대학（法政大学）국제일본학연구소

파리에 있는 국립동양문화언어학원（INALCO）교수로, 지난 해 개최된 알자스 심포지움에 참가해 주었던 일본고대사 전문가 마세 교수가 내일하여, 2월

20일（금），본 연구소에서 아비코（安孫子）소장, 오구치（小口）소원과 간담회를 가졌다. 일본고대사 연구를 위한 일본과 유럽 연구자들의 연구협력 방안과, 장래에 있어서 INALCO와 국제일본학연구소, 나아가서는 INALCO와 호세이대학과의 협력관계 확립을 위해 유익한 의견 교환이 이루어졌다.

【기사 집필：아비코 신（安孫子 信，

호세이대학 국제일본학연구소 소장・문학부 교수）】

サイエド・R・アーメリー教授の法政大学訪問

●日 時：2009年2月24日（火）10時30分～12時00分

●場 所：法政大学九段校舎

イラン発信の日本研究 ― エリア研究への挑戦

イラン・テヘラン大学副学長、大学院世界研究科長でサイエド・レザー・アーメリー氏が2009年2月24日、本学を訪問し、星野勉・常務理事と安孫子信・国際日本学研究所所長と有意義な会談の機会をもった。同研究所専任所員・教授の王敏は同席した。

最初に星野理事が本学の国際日本学研究所の全体像を紹介した。ついで安孫子所長が西洋における日本研究の状況を説明、王敏は日本研究のうち東アジア及び中国における現状と成果について説明した。それを受けて、アーメリー氏がイランにおける日本研究の実態を語った。

イランにおける日本研究はイランで最も古い、最大で最高の学府、テヘラン大学が中心という。1934年に開学し、現在16の学部で3万2千人の学生が学んでいる。日本語は1989年に選択科目として、1994年に学科が創設され、現在定員の枠は73名との紹介があった。

アーメリー氏は、「私たちにあって、日本はイランから遠い存在ではない。日本は政治的な関係や文化的、社会的、経済的な側面だけでなく、生活の場所、空間を共有するという意味において隣人と捉えるべきなのである」と言う。

日本語学科を現状から前進させなければならないという。改善、さらには改革・発展の必要性が明らかである。というのはグローバル化と知的交流の趨勢に、日本研究も巻き込まれていることを指摘しないわけにはいかない背景があるという。

物理的時空を超えてイランと日本を「隣人」関係に近づけさせたのは二重のグローバル化と、アーメリー氏は捉えている。物理的な空間でのグローバル化とバーチャルな空間でのグローバ

ライゼーションである。二重のグローバル化が並行しながら同時に結び付いているし、無限に広がっていく。物理的時空を超えて、異なる地域の異人同士を互いに結びつけている。よって、配慮の利いたメッセージを相互に伝え、立場を理解し、交換する、異文化理解が自他共に必須である。

イランでは米英仏の研究は進んでいるが、日本研究の実態は国立図書館の日本関係図書所蔵数を通して明瞭である。蔵書は602冊、論文25本にとどまる。

だが、2009年9月に日本研究プログラムがスタートする予定である。それも分野別の枠を打破し、学際的なプログラムを設定している（28単位／年）。たとえば、日本と中国、日本とアメリカのようにリンクしたエリア研究を進めていくという。中国政府肝いりの孔子学院も合わせて発足する予定である。二重のグローバル化が深化していく中、同じ漢字を使う日本だけを漢字文化圏の枠から抽出して扱うことはもはやできなくなるからであろう。

アーメリー氏は今回の訪問にあたって、東アジアの視野で日本研究を捉えなおすことを参考にしたとしている。特に中国における日本研究や、日中の文化関係および孔子学院にも関心事だったという。また、エリア研究の一環として捉えた日本研究プログラムの設立は、イランにとって歴史的な出来事だと言明している。

最後にアーメリー氏からすばらしいメッセージを寄せられた。「厳しい状況だからこそ理解することが必要。そこでまず文化交流から！！」

エリア研究としての日本研究の発展に注目し、イランからの発信を心から待ちたい。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】



後列 左より安孫子所長、国際交流基金担当者の方

前列 左より星野センター長、サイエド・R・アーメリー教授、王教授

Visit to Center by Professor Saied Reza AMELI

Date Tuesday, 24 February 2009, 10:30-12:00
Venue Hosei University Research Kudan Building

Dean of Faculty of Global Studies at Tehran University, Iran, Professor Ameli, who was in Japan by invitation from the Japan Foundation, visited Hosei University on Tuesday, 24 February, and there was opportunity for a meeting with the Professor for Governor Hoshino, Director Abiko and Staff Member Wang in the Kudan Building.

Tehran University Faculty of Global Studies is planning to create a Japanese Department in 2010, and Dean Ameli was visiting Japan to gather information for this end, and to strengthen ties. There was an enthusiastic exchange of ideas, and Dean Ameli was keen to refer to the experience of the Research Center for International Japanese Studies in establishing an organization, and expressed a wish to develop positive cooperation in research.

Report by: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

关于萨义德·R·阿梅尼教授访问法政大学的报告

时 间：2009年2月24日（周二）10:00-12:00
地 点：法政大学九段校舍

具有伊朗特色的日本研究 — 区域研究的尝试

2009年2月24日（周二），伊朗德黑兰大学世界研究学部阿梅尼学部长对法政大学进行了访问，并在九段校舍与法政大学常务理事星野勉、国际日本学研究所所长安孙子信、国际日本学研究所专职职员・教授王敏

举行了会谈。由于德黑兰大学世界研究学部目前正在筹划于2010年开设日本学科。因此，阿梅尼学部长此次应国际交流基金的邀请来日访问，主要目的就在于收集信息，并寻找合作伙伴。在会谈中，双方热情而坦诚地就有关问题交换了意见。阿梅尼学部长表示，伊朗德黑兰大学世界研究学部既要在筹备开设日本学科的过程中，充分参考借鉴法政大学国际日本学研究所的成功经验，同时也要积极推动双方在将来建立起合作研究关系。

【执笔者：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）】

사이예드·R·아멜리 교수 호세이대학 (法政大学) 방문

· 일 시 2009년 2월 24일 (화) 10시 30분 ~ 12시 00분
· 장 소 호세이대학 구단 (九段) 캠퍼스

이란의 일본연구 — 지역 연구에의 도전

국제교류기금의 초청으로 내일 중인 아멜리 이란·테헤란대학 세계연구학부 학부장이 2월 24일 (화) 호세이대학을 방문하여, 호세이대학 구단캠퍼스에서

호시노 (星野) 이사, 아비코 (安孫子) 소장, 왕 (王) 소원과 간담회를 가졌다. 테헤란대학 세계연구학부는 2010년에 일본학과의 개설을 계획하고 있는데, 아멜리 학부장은 학과 개설을 위한 정보 수집과 협력 요청을 위해 내일했다고 한다. 참석자간에는 시종 진지한 의견 교환이 이루어졌는데, 아멜리 학부장은 국제일본학연구소의 경험을 참고로 하여 개설 준비를 추진할 뿐 아니라, 장래에 있어서는 국제일본학연구소와의 연구협력도 적극적으로 실시하겠다는 의향을 표명했다.

【기사 집필: 왕 민

(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)】

ローザ・カーロリ教授の法政大学訪問

●日 時：2009年3月16日（月）16時00分～16時30分

●場 所：法政大学九段校舎

イタリア、カ・フォスカリ大学における日本研究・教育——人材育成への熱意

イタリアのカ・フォスカリ大学東アジア研究所副教授のローザ・カーロリ氏が、2009年3月16日に本学を訪問し、星野勉・常務理事、安孫子信・国際日本学研究所所長、王敏・同研究所専任所員・教授と有意義な会談の機会をもった。ローザ・カーロリ氏の研究分野は日本近現代史であり、特に沖縄史が専門である。カーロリ氏は本学国際日本学研究所の客員所員としてこれまで両研究所の協力関係に尽力しており、毎年日本訪問の機会にあわせて本学を幾度も訪問し、交流を積み重ねている人物である。

まず、星野理事と安孫子所長より、本学の国際日本学研究における最近の研究事情について紹介された。王敏は、近年の日本学研究における中国との関わりについて若干の説明を行った。

カーロリ氏からは、カ・フォスカリ大学東アジア研究所における日本研究と教育について紹介があった。ベネチアにあるカ・フォスカリ大学は、イタリア国立大学である。カーロリ氏の紹介によれば、イタリアの大学は国立大学が90%、私立大学が10%という割合で、私立はほぼ貴族学校で、その学費も国立大学よりも10%以上高額であるという。

カーロリ氏が所属する東アジア研究所では、所属する学生の約三分の二が中国の政治経済について学んでおり、その動機は主に就職を考慮しているとのことである。日本の政治経済について学ぶ学生は約三分の一で、その動機は趣味的な関心の強さによるものだという。学生たちの中国に対する関心は、卒業後の就職を

視野に入れたもので、政治経済への関心が高い。一方で、文化に視点を移すと、日本文化を学ぶ学生が三分の二、中国文化について学ぶ学生が三分の一というように、逆転の現象が顕著である。現在、イタリアでは日本のマンガやアニメの人気の高まっており、若者たち、特に日本語を学ぶ学生たちは日本文化に高い関心をもっていることがうかがえる。しかし、日本語専攻の学生は2008年から就職難に直面しており、卒業後の進路について不安を抱いているということも紹介された。

カ・フォスカリ大学東アジア研究所では、日本と中国について学ぶ学生が全体の42%に達し、研究所の存在意義における日本と中国への研究の重要性が明らかである。また、この数字は、イタリアにおける東アジア研究において、日本と中国がひとつの地域として認識され、重要視されていることを裏付けるものだと考えられる。

カ・フォスカリ大学東アジア研究所所属学生の学習状況を見ると、日本語履修者の方が中国語履修者よりもやや多いが、日本語専攻コースでは、現在教員不足が深刻な問題になっているという。7名の専任教員と6名の非常勤教員が967名の学生を教えており、教員の負担は深刻である。カーロリ氏は困難な状況を指摘しつつも、日本語教育の環境を整備しながら日本関係の人材育成を進めていきたいと熱意を語った。出席者は両研究所の協力の一層の発展についてあらためて確認し、実り多い会談となった。イタリアにおける日本研究・教育でのカーロリ氏の一層の活躍を期待したい。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】



左より 安孫子所長、星野センター長、ローザ・カーロリ教授、王教授

Visit to Center by Professor Rosa CAROLI

Date Monday, 16 March 2009, 16:00-16:30
Venue Hosei University Kudan Building

“Japanese Research and Education at Ca’ Foscari University, Italy: Enthusiasm towards Nurturing Human Resources”

Rosa Caroli, Professor of the East Asian Institute, Ca’ Foscari University, Italy, visited our university on 16 March 2009, and talked with HOSHINO Tsutomu, Governor, and ABIKO Shin, Director of the Research Center for International Japanese Studies, and WANG Min, Professor and staff appointee of the Center. Rosa Caroli specializes in modern Japanese history, in particular Okinawan history, and has hitherto contributed greatly to research cooperation as her role of guest staff in our Research Center for International Japanese Studies.

We heard from Professor Caroli about Japanese research and education at the East Asian Institute, Ca’ Foscari University. At present, with employment prospects in mind, there are more students studying Chinese politics and economics than those of Japan, but regarding cultural matters, there is an opposite phenomenon of more students studying Japanese culture. Employment difficulties for students majoring in Japanese and staff shortage are serious problems, but she talked enthusiastically about reorganizing the teaching environment and nurturing Japan-related human resources.

Those present agreed on developing cooperation between the two institutions a degree further, and it became a fruitful discussion. We await the results of Professor Caroli’s further activity within Japanese research and education in Italy.

Report by WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

关于罗萨·卡洛里教授访问法政大学的报告

时 间：2009年3月16日（周一）16：00-16：30
地 点：法政大学九段校舍

意大利威尼斯大学的日本研究·教育概况——重视人才的培养

2009年3月16日（周一），意大利威尼斯大学东亚研究所副教授罗萨·卡洛里对法政大学进行了访问，并与法政大学常务理事星野勉、国际日本学研究所所长安孙子信、国际日本学研究所专职所员·教授王敏举行了会谈。罗萨·卡洛里教授是日本近现代史，尤其是冲绳史研究领域的专家。作为法政大学国际日本学研究所的客员所员，罗萨·卡洛里教授还始终致力于推动双方的合作研究。

在会谈中，罗萨·卡洛里教授首先介绍了威尼斯大

学东亚研究所在日本研究及教育方面的有关情况。据罗萨·卡洛里教授称，目前，在就业形势的导向下，在政治经济领域，选择研究中国的学生超过了选择研究日本的学生，但在文化领域，选择学习日本文化的学生则超过了选择学习中国文化的学生，而这一现象与以往的情况正好相反。对此，罗萨·卡洛里教授表示，尽管日语专业学生的就业难和日语专业教师的不足已经成为非常严峻的现实问题，但是威尼斯大学东亚研究所仍将尽最大的努力，不断改善教育环境，积极培养与日本相关的人才。

出席会谈的双方一致同意进一步加强威尼斯大学东亚研究所与法政大学国际日本学研究所的合作关系。会谈最终取得了丰硕的成果。同时，我们也期待着罗萨·卡洛里教授今后能够在意大利的日本研究·教育领域发挥更大的作用。

【执笔者：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）】

로자·카로리 교수 호세이대학 (法政大学) 방문

- 일 시 2009년 3월 16일 (월) 16시 00분 ~ 16시 30분
- 장 소 호세이대학 구단 (九段) 캠퍼스

이탈리아, 카·포스카리대학의 일본 연구와 교육——인재 육성에 대한 열의

이탈리아에 있는 카·포스카리대학 동아시아연구소 부교수, 로자·카로리씨가 2009년 3월 16일 본교를 방문하여 호시노 츠토무 (星野 勉) 상무이사, 아비코 신 (安孫子信) 국제일본학연구소 소장, 왕민 (王敏) 동 연구소 전임 소원·교수등과 간담회를 가졌다. 로자·카로리씨의 전문 분야는 일본근현대사, 특히 오키나와 (冲縄) 역사인데, 현재, 본교 국제일본학연구소 객원 소원으로 연구협력에 진력하고 있다.

카로리씨는 카·포스카리대학 동아시아연구소에서 진행하고 있는 일본 연구와 교육에 대해 소개했다. 카로리씨에 의하면, 현재, 정치경제면에 있어서는 취업을 고려해 일본보다는 중국의 정치경제를 공부하는 학생의 수가 많으나, 중국문화보다는 일본문화를 공부하는 학생의 수가 많아 문화면에 있어서는 역전현상을 보이고 있다고 한다. 카로리씨는 일본어를 전공하는 학생들의 취업난과 교원 부족이 심각한 문제이나, 앞으로 교육환경을 정비하여 일본관련 인재육성에 박차를 가하겠다는 열의를 표명했다.

참석자들은 양 연구소의 협력 관계를 한층 발전시킬 것을 확인하는 등, 성과가 많은 회담이 되었다. 이탈리아의 일본 연구와 교육을 위한 카로리씨의 눈부신 활약을 기대해 본다.

【기사 집필: 왕 민

(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)】

王秀文教授の研究所訪問

●日 時：2009年4月22日（水）18時30分～20時30分

●場 所：法政大学国際日本学研究所

国、大連民族学院における異文化 コミュニケーション研究・教育

中国の大連民族学院（大学）国際言語文化研究センター長である王秀文氏が、2009年4月22日に本学を訪問し、徳安彰・常務理事、林公美・国際交流センター長、廣岡康久・同交流センター課長ほかと両大学の交流について有意義な意見交換した後、星野勉・常務理事、安孫子信・国際日本学研究所所長、王敏・同研究所専任所員・教授と会談の機会をもった。

大連民族学院は、中国東北地方の沿海都市大連にある重点大学である。中国の大学は一般的には教育部に属するが、大連民族学院は国家民族委員会に属する国立総合大学として、多民族中国ならではの特色ある教育と研究を実践している。工学、理学、経済学、管理学、文学、法学にわたる37の学科を有するほか、外国人留学生教育を担当する国際交流学院を設置している。

大連民族学院の外国語言語文化学院は、日本語学科、英語学科、韓国語学科、及び教養科目としての大学外国語学部があり、語学と日中異文化理解・異文化コミュニケーションを教育の特色としている。今回本学を訪問した王秀文氏は、外国語言語文化学院の創設者であり元院長でもある。氏は大連民族学院における日中異文化理解・異文化コミュニケーション、ならびに日本語・日本文化の教育・研究事情について詳細な説明をされた。

王秀文氏の紹介によれば、大連民族学院における日中異文化理解・異文化コミュニケーション研究は、大学改革と関連させた高度な次元から実施されているという。学院には研究施設として国際言語文化研究センターが設置されており、その傘下に日本文化研究所、東北二宮尊徳研究所、翻訳・比較文化研究所があり、現在は日本企業文化研究所の設置が考案されているという。隔年開催の国際シンポジウムや各年開催のフォーラムなど、研究交流も活発に開催されているほか、学術論文集『東方論叢』を刊行している。

また、外国語文化学院の日本語学科は、大学の重点学科、師範性学科、教育部特色建設点学科、国家民族

委員会重点学科、遼寧省師範性学科として登録されており、中国における日本語・日本文化教育基地として国内外から注目されているという。日本の大学との協力関係も緊密であり、北陸先端科学技術大学院大学、秋田大学、桜美林大学、福岡国際大学、金沢星稜大学への研究生、大学院生の派遣などを行っている。

大連民族学院の斬新的な取り組みに対しては、日ごろより当研究所の専任所員 王敏も非常に注目しており、具体的に以下の点について指摘を行った。①日中異文化理解・異文化コミュニケーションへの取り組みを大学改革のうちに位置づけ、大学内の研究・教育機関を拡充させている点、②若い世代の人材育成の一環として、日中異文化理解・異文化コミュニケーションを重視している点、③北京オリンピック開催の際に、異文化理解の重要性が強調されたが、そうした国家的取り組みに連動する教育理念、④王秀文氏の研究成果を、本学発行の『21世紀 COE 国際日本学研究叢書 5 相互理解としての日本研究——日中比較による新展開——』（2007年3月）、『日中文化の交差点』（2008年3月）に掲載するなどの、本学との活発な研究交流の実績。以上4点について、王秀文氏と意見交換を行った。

星野勉・常務理事、安孫子信・国際日本学研究所所長からも、大連民族学院と本学との一層の教育・研究交流関係の強化を期待する旨の希望が述べられ有意義な意見交換がなされた。今回の会談により、大学間の交流を中心に、双方の研究所における①国際シンポジウム開催の協力、②相互の論文集の執筆・編集への協力、③相互の研究プロジェクトへの協力、④相互の研究調査・研究員派遣への協力、⑤定期的な研究発表・学術講演開催への協力、などについて具体的な話し合いが行われた。出席者は両研究所の協力の一層の発展についてあらためて確認し合うことができ、会談は実り多いものとなった。大連民族学院と本学との今後一層の交流強化を期待したい。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】



左より 安孫子所長、星野センター長、
王 秀文教授ご夫妻、王 敏教授

Visit to Center by Professor WANG Xiuwen

Date Wednesday, 22 April 2009, 18:30-20:30
 Venue Hosei University Research Center for International Japanese Studies

“Research and Education in the Communication of ‘Other’ Culture at Dalian Nationalities University, China”

Director of the International Language and Culture Research Center of Dalian Nationalities University, WANG Xiuwen visited our university on 22 April 2009, and had important discussions regarding exchange between the two universities with Governor TOKUYASU Akira, International Exchange Center Director, HAYASHI Kimiyoshi and Center Manager, HIROOKA Yasuhisa, and others. Research Center for International Japanese Studies Governor, HOSHINO Tsutomu, Director, ABIKO Shin, and Staff

Appointee/Professor WANG Min were also granted a meeting, and WANG Xiuwen talked about Japanese/Chinese understanding of ‘other’ culture and communication in ‘other’ culture, and about the state of research and education in Japanese language and culture.

On this occasion we discussed the cooperation of both Centers towards 1) holding international symposiums, 2) providing papers for and editing a joint academic journal, 3) joint research projects, 4) research trips and sending visiting scholars, and 5) holding regular research presentations and academic talks etc. The meeting was worthwhile in confirming among the participants an increased cooperation between the two Centers. We look forward to further, greater exchange between Dalian Nationalities University and this university.

Report by WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

关于王秀文教授访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间：2009年4月22日（周三）18：30-20：30
 地 点：法政大学国际日本学研究所

中国大连民族学院的异文化交流研究・教育

2009年4月22日（周三），中国大连民族学院（大学）国际语言文化研究中心主任王秀文先生对法政大学进行了访问，并与法政大学常务理事德安彰、国际交流中心主任林公美、课长广冈康久等有关人员就双方进行交流合作的相关事宜举行了会谈。此外，王秀文先生还与法政大学常务理事星野勉、国际日本学研究所所长安

孙子信、专任所员・教授王敏一同座谈，并对大连民族学院的日中异文化理解・异文化交流以及日语・日本文化的教育・研究情况进行了说明。

在此次会谈中，双方主要就以下几个方面的合作事项进行了协商：①合作召开国际研讨会；②合作撰写・编辑论文集；③合作开展研究项目；④合作进行研究调查，互派研究人员；⑤合作举行定期的研究成果发表会・学术演讲。出席会谈的双方一致同意进一步加强大连民族学院国际语言文化研究中心与法政大学国际日本学研究所的合作关系。会谈最终取得了丰硕的成果。同时，我们也期待着大连民族学院与法政大学能够在今后建立起更加深入紧密的合作关系。

【执笔者：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）】

왕수문 (王秀文) 교수 연구소 방문

・ 일 시 2009년 4월 22일 (수) 18시 30분 ~ 20시 30분
 ・ 장 소 호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소 퍼스

중국, 대련민족학원의 이문화 커뮤니케이션 연구・교육

중국의 대련민족학원 (대학) 국제언어문화연구센터장인 왕수문 (王秀文) 씨가, 2009년 4월 22일 본교를 방문하여 도쿠야스 아키라 (徳安彰) 본교 상무이사, 하야시 기미요시 (林公美) 국제교류센터장, 히로오카 야스히사 (廣岡康久) 동 교류센터 과장, 그 외 관계자들과 함께, 양 대학의 교류에 관해 유익한 의견을 교환했다. 또한, 호시노 츠토무 (星野勉) 상무이사, 아비코 신 (安孫子信) 국제일본학연구소 소

장, 왕민 (王敏) 동 연구소 전임 소원・교수등과도 간담회를 가졌다. 왕수문씨는 대련민족학원에서 추진하고 있는 일・중 이문화 이해와 이문화 커뮤니케이션, 일본어・일본문화의 교육과 연구 상황에 관해 설명했다.

이번 간담회를 통해서, 양 연구소는 ①국제심포지움 개최협력, ②상호 논문집 집필・편집을 위한 협력, ③상호 연구 프로젝트를 위한 협력, ④연구조사・연구원 파견을 위한 협력, ⑤정기적인 연구발표・학술강연 개최를 위한 협력, 등에 관하여 논의하였다. 참석자들은 양 연구소의 협력 관계를 한층 발전시킬 것을 확인하는 등, 많은 성과를 거둔 회담이 되었다. 금후, 대련민족학원과 본교간에 한층 더 강화된 교류가 이루어지기를 기대한다.

【기사 집필：왕 민

(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)】

안드레·클라인氏の研究所訪問

- 日 時 : 2009 年 5 月 29 日 (金) 13 時 00 分 ~ 13 時 30 分
- 場 所 : 法政大学国際日本学研究所

去る 5 月 29 日に、フランス、アルザスの古都コルマル近郊キーンツハイムにあるアルザス欧州日本学研究所 (CEEJA) 所長안드레·클라인氏が法政大学国際大学日本学研究所 (HIJAS) を訪問された。

CEEJA と HIJAS とは 2 年前から研究提携の關係にあり、2007 年から年一度の共同シンポジウムを CEEJA を会場に開催している。また 2009 年春には法政大学文学部哲学科ゼミの海外研修を CEEJA は受け入れて下さっている。

今回のクライン所長の訪問でも、すでに計画が進んでいる本年度の共同シンポジウム (<身体・身体性> をテーマに 11 月 1 日~3 日開催予定) とゼミ海外研修について、あらためて意見調整を行うとともに、将来における両者の協力關係の強化についても、有意義

な意見交換が行われた。

【記事執筆 : 安孫子 信

(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)】



左より 安孫子所長、
星野センター長、
안드레·클라인氏、
CEEJA 日本代表部
の方

Visit to Center by Mr André KLEIN

Date Friday, 29 May 2009, 13:00-13:30
Venue Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

On 29 May a visit was made to the Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS) by André Klein, Director of Centre Européen D'Études Japonaises D'Alsace (CEEJA), which is located in Kientzheim near the ancient city of Colmar in Alsace, France.

There has been a research partnership between CEEJA and HIJAS over the last two years, and since 2007

an annual joint symposium has been held at the CEEJA. Spring 2009 also saw the CEEJA kindly hosting the overseas course for the Philosophy Department Seminar of the Faculty of Letters, Hosei University.

This visit by Mr Klein further provided opportunity to discuss the plans which are already underway for this year's joint symposium (theme: "Body, Embodiment" scheduled for 1-3 November). There was also important sharing of views relating to future cooperation between the two institutions.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于安德烈·克莱因先生访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间 : 2009 年 5 月 29 日 (周五) 13 : 00-13 : 30
地 点 : 法政大学国际日本学研究所

2009 年 5 月 29 日 (周五), 阿尔萨斯欧洲日本学研究所 (CEEJA) 所长安德烈·克莱因先生对法政大学国际日本学研究所 (HIJAS) 进行了访问。

阿尔萨斯欧洲日本学研究所位于法国阿尔萨斯古都科尔马近郊的肯兹海姆, 从 2 年前开始和法政大学国际日本学研究所建立起合作研究关系。自 2007 年起,

CEEJA 和 HIJAS 每年联合举行一次共同研讨会, 会场就设在 CEEJA。此外, 2009 年春, CEEJA 还接待法政大学文学部哲学科进行了海外研修。

在此次访问过程中, 克莱因所长与法政大学国际日本学研究所再次就法政大学的海外研修以及正在筹备的本年度共同研讨会 (预定于 11 月 1 日~3 日召开, 主题暂定为“身体·身体性”) 的相关事宜进行了协商, 并就如何在将来进一步加强双方的合作关系等问题交换了意见。

【执笔者 : 安孙子 信

(法政大学国际日本学研究所所長・文学部教授)】

앙드레·클라인씨 본 연구소 방문

· 일 시 2009 年 5 月 29 日 (금) 13 時 00 分 ~ 13 時 30 分
· 장 소 호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소

지난 5 月 29 日 프랑스 알자스 구주일본학연구소 (CEEJA) 소장인 앙드레·클라인씨가 호세이대학 국제일본학연구소 (HIJAS) 를 방문했다. 알자스 구주일본학연구소 (CEEJA) 는 프랑스 알자스의 고도 (古都) 인 콜마 근교, 킨츠하임에 위치하고 있다.

CEEJA 와 HIJAS 는 2 年 전부터 연구 제휴를 맺고

있으며, 2007 년부터 매년 한 차례씩 CEEJA 가 회의장을 제공하여 공동 심포지움을 개최하고 있다. 또한 CEEJA 는 2009 年 봄에 호세이대학 문학부 철학과 세미나의 해외 연수를 받아주기도 했다.

이번 클라인 소장의 방문에서는 현재 계획을 추진중인 올해 공동 심포지움 (<신체·신체성> 을 테마로 11 月 1 日~3 日 개최 예정) 과 세미나 수업의 해외 연수에 관해 심도 깊은 의견조정이 이루어졌다. 아울러, 장래의 상호협력관계강화에 관해서도 유익한 의견을 교환했다.

【기사 집필 : 아비코 신 (安孫子 信,

호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)】

サカエ・ムラカミ = ジルー教授との懇談

●日 時：2009年2月23日（月）10時00分～12時00分

●場 所：品川プリンスホテル

フランス・ストラスブール大学教授でアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）副所長も務めておられる日本中世文学のムラカミ = ジルー教授が来日され、2月23日（月）には逗留先ホテル内の喫茶室で、同教授と、星野理事、所長安孫子との間で懇談の機会が持たれた。

一昨年来すでに軌道に乗って年一回 CEEJA で開催されている国際日本学の共同シンポジウムについて、また直接の関連マターではないものの、今年初めて行われた文学部哲学科ゼミの CEEJA での研修について、有意義な意見交換が行われ、協力関係の更なる強化が話し合われた。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）】



2009年2月アルザス研修の哲学科生をストラスブールで迎えてくださったムラカミ = ジルー教授（最前列右から二人目）

Meeting with Professor Sakae MURAKAMI-GIROUX

Date Monday, 23 February 2009, 10:00-12:00

Venue Shinagawa Prince Hotel

Medieval Japanese literature's Professor Murakami-Giroux of Strasbourg University, France, who is also Vice President of Centre Européen D'Études Japonaises D'Alsace (CEEJA), was visiting Japan and on Monday 23 February there was an opportunity for a meeting between her and Governor Hoshino and Director Abiko at the tea

room of the hotel at which she was staying. There was significant exchange of ideas relating to the joint symposium in international Japanese studies established two years ago and held each year at CEEJA, and, although not a directly-related matter, about the course held at CEEJA for the first time as part of the Faculty of Letters' Philosophy Seminar. Even greater cooperation for these events was discussed on this occasion.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

与栄・村上＝吉魯教授座談紀要

時 間：2009年2月23日（周一）10：00-12：00

地 点：品川王子飯店

2009年2月23日（周一），法政大学常务理事星野勉・国際日本学研究所所長安孫子信在品川王子飯店茶餐厅与来日访问的栄・村上＝吉魯教授举行了座谈。栄・村上＝吉魯先生既是法国・斯特拉斯堡大学的教授，同时也担任阿尔萨斯欧洲日本学研究所（CEEJA）副所长，是日本中世文学研究领域的专家。

自前年起，CEEJA 与法政大学国际日本学研究所每年联合举办一次的国际日本学共同研讨会开始步入正轨，会场就设在 CEEJA。此外，法政大学文学部哲学科今年还首次在 CEEJA 进行了海外研修。在座谈中，双方就共同研讨会以及海外研修等相关事宜，再次坦诚而深入地交换了意见，并一致表示今后将进一步强化彼此间的合作关系。

【执笔者：安孫子 信

（法政大学国际日本学研究所所長・文学部教授）】

사카에・지루・무라카미 교수와의 간담회

・일 시 2009년 2월 23일（월）10시 00분～12시 00분

・장 소 시나가와프린스호텔

프랑스・스트라스부르그대학 교수로 구주일본학연구소（CEEJA）부소장을 맡고 있는，일본중세문학 전문가 무라카미 교수가 내일하여，2월 23일（월）체류중인 시나가와프린스호텔내 커피숍에서 호시노（星野）이사，아비코（安孫子）소장과 간담회를 가졌다．

이미 재작년부터 웨도에 올라 CEEJA 에서 매년 한 번씩 개최되고 있는 국제일본학 공동 심포지움에 관한 사항과，심포지움과는 직접 관련은 없으나 올 해 처음으로 CEEJA 에서 실시한 호세이대학（法政大学）문학부 철학과 세미나 연수에 관하여 유익한 의견 교환이 이루어졌다．아울러，향후，한층 강화된 협력관계를 구축해 나가기로 합의했다．

【기사 집필：아비코 신（安孫子 信，

호세이대학 국제일본학연구소 소장・문학부 교수）】

〈お知らせ〉

ニュースレター NO.11 翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

(中国語翻訳)

謝 宗睿 (法政大学国際日本学研究所 外国人客員研究員)

(韓国語翻訳)

申 惠蘭 (法政大学大学院国際日本学インスティテュート)

法政大学国際日本学研究所は、このたび、研究所の①正式英語名称と、②その略号、および、③それに基づくロゴを、以下のように決めましたのでお知らせいたします。

- ① Hosei University Reseach Center for International Japanese Studies
- ② HIJAS (Hosei University Reseach Center for International **J**apanese **S**tudies)
- ③ 表紙右上を参照してください

新刊案内

国際日本学 第6号 研究成果報告集

研究成果報告

- ・ Auguste Comte selon Ikutaro Shimizu 安孫子信
— Une lecture de la sociologie comtienne faite par un sociologue japonais —
- ・ 「日本と日本文化に関する」調査についての報告 王 敏
- ・ 直き天皇 — 江戸時代にとって天皇とは何であったか 田中優子
- ・ 「海東諸国紀」の「琉球国図」の地名と『おもしろさうし』 福 寛美
- ・ 山岳民族の集落構成の比較研究試論 — 貴州とトラジャの比較を試みる — 細田亜津子

若手研究者論文

- ・ カンボジアと日本の仏教説話にみる布施 ペン セタリン
- ・ 桃と『古事記』 彭 丹
- ・ 手塚治虫の実験アニメーションの表現技法 吳恵京
- ・ 安部公房の文学における「故郷」 金鉉姫

2007 年度研究チーム報告 安孫子信, 王 敏, ヨーゼフ・クライナー, 小口雅史
彙報

国際日本学 第6号	
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES : Annual Report No. VI	
法政大学国際日本学研究所 研究成果報告集	
研究成果報告	3
◆ Auguste Comte selon Ikutaro Shimizu — Une lecture de la sociologie comtienne faite par un sociologue japonais —	安孫子 信 3
◆ 「日本と日本文化に関する」調査についての報告	王 敏 21
◆ 直き天皇 — 江戸時代にとって天皇とは何であったか	田中 優子 39
◆ 「海東諸国紀」の「琉球国図」の地名と「おもしろさうし」	福 寛美 63
◆ 山岳民族の集落構成の比較研究試論 — 貴州とトラジャの比較を試みる —	細田亜津子 109
若手研究者論文	
◆ カンボジアと日本の仏教説話にみる布施	ペン セタリン 151
◆ 桃と「古事記」	彭 丹 165
◆ 手塚治虫の実験アニメーションの表現技法	吳 恵京 181
◆ 安部公房の文学における「故郷」	金 鉉姫 203
2007年度研究チーム報告	
..... 安孫子 信, 王 敏, ヨーゼフ・クライナー, 小口 雅史	225
巻頭	243

お問い合わせ先
法政大学国際日本学研究所
TEL 03-3264-9682

国際日本学とは何か？

中国人の日本観

コンセプト 王 敏

I 中国における日本研究の概観

- ・ 中国の日本研究 — 回顧と展望 — 李 玉 (翻訳: 坂部晶子)
- ・ 中国の日本史研究 — 日本研究論著の統計的分析を中心に — 李 玉 (翻訳: 坂部晶子)
- ・ 現代中国における日本文学の紹介 — 日本文化の一環として — 王 敏

II 時代を追う日本観の変容

- ・ 唐宋詩人的「日本」想像 葉国良 (翻訳: 林 恵子)
- ・ 近代における中国人の日本観の変遷 王曉秋 (翻訳: 王 雪萍)
- ・ 近代文化論から見た李春生の日本観 — 『主津新集』と『東遊六十四日隨筆』を中心に — 徐興慶
- ・ 二〇世紀一〇—二〇年代中国の教科書に見る日本像 — 民国臨時政府—南京政府成立まで — 徐 冰
- ・ 中国映画の中の日本人像 孫雪梅 (翻訳: 玉腰辰己)
- ・ 日本留学時期の周恩来の日本観 — 『周恩来旅日日記』を手がかりに — 胡 鳴

III 受容された日本の文学と言語

- ・ 中国近代文学の発生と発展における中日関係 — 文化交流から生存体験まで (概要) —

- ・ 清末民初における日本語文学漢訳題材の特徴を論じる 李 怡 (翻訳: 及川淳子)
- ・ 五四時期の「小詩」による俳句の取り込みについての総論 付建舟 (翻訳: 小池 陽)
- ・ 「憂い顔の童子」 — 森の中の孤独な騎士 — 羅振亜 (翻訳: 金澤 妙)
- ・ 「僑詞」の帰順と近代日中文化の相互作用 — 「衛生」、「物理」、「小説」を例に — 許金龍 (翻訳: 石岡陶子)
- ・ 馮天瑜 (翻訳: 及川淳子)

IV 日中文化研究

- ・ 新しい日本と新しい中国とを結ぶべき紐 — 陶晶孫『日本への遺書』を読む — 楊剣龍 (翻訳: 孫 軍悦)
- ・ 中国人の日本における国際理解に関する研究 楊曉文
- ・ 新渡戸稲造と日本の文化外交 劉岸偉
- ・ 「変節」に寛容な日本的現象 — 「変節」「転向」考察その1 — 王 敏
- ・ 転向と向き合う作家・辻井喬論 — 「変節」「転向」考察その2 — 王 敏



定価 (本体 3,800 円 + 税) 三和書籍刊
お問い合わせ先
三和書籍 TEL 03-5395-4630



法政大学国際日本学研究センター
国際日本学研究所

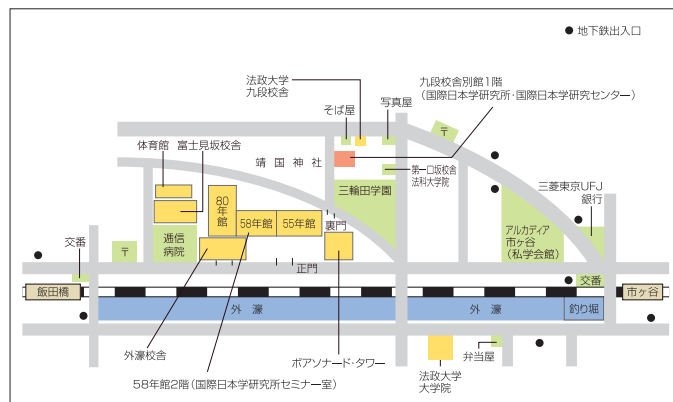
〒102-0073

東京都千代田区九段北3-2-3 九段校舎別館1階

TEL 03-3264-9682 FAX 03-3264-9884

E-mail nihon@hosei.ac.jp

URL: http://aterui.i.hosei.ac.jp/



この冊子は再生紙を使用しています。